

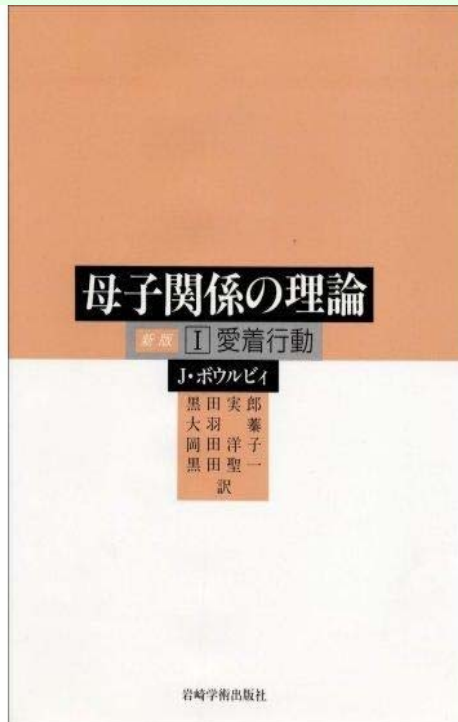
生涯発達心理学

遠藤 利彦
(教育学研究科)

‡：このマークが付してある著作物は、第三者が有する著作物ですので、同著作物の再使用、同著作物の二次的著作物の創作等については、著作権者より直接使用許諾を得る必要があります。

- 親子・家族関係と子どもの社会情緒的発達
- 特にボウルビー(Bowlby, J.)による
アタッチメント理論に依拠

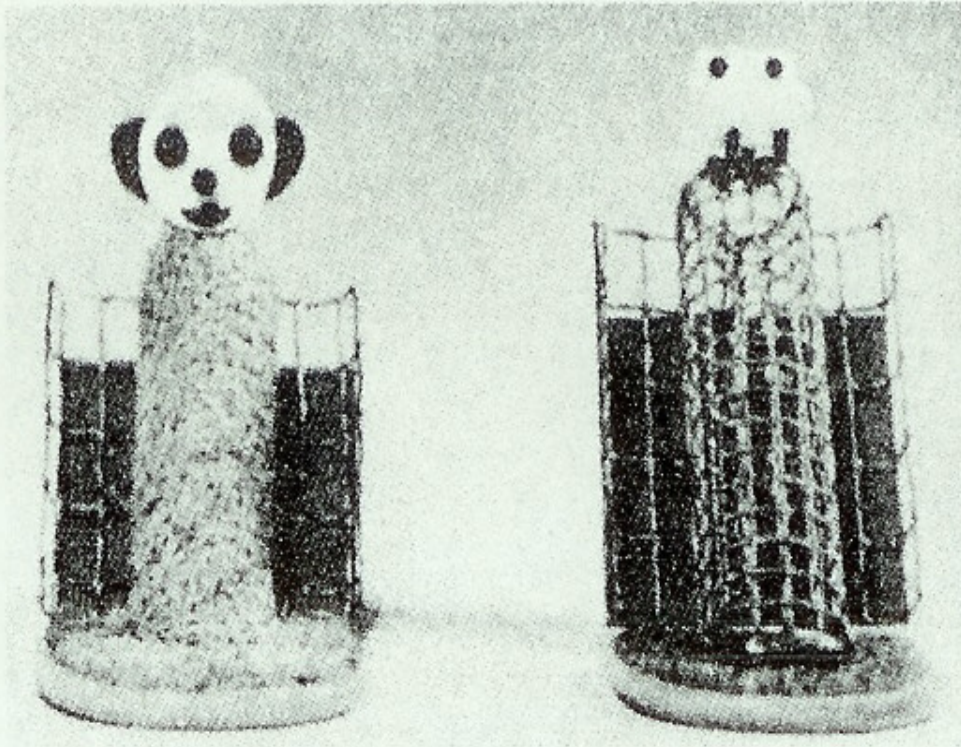
著作権処理の都合上、
この場所に挿入されて
いた図を省略させて
いただきます。



- ・ ボウルビィ; 黒田 実郎(1991)『母子関係の理論 1 愛着行動』,岩崎学術出版社
- ・ ジョン ボウルビィ (著), John Bowlby (原著), 黒田 実郎 (翻訳)(1995)『母子関係の理論 2 分離不安』,岩崎学術出版社
- ・ ジョン ボウルビィ (著), John Bowlby (原著), 黒田 実郎 (翻訳), 横浜 恵三子 (翻訳), 吉田 恒子(1981)『母子関係の理論 3 対象喪失』,岩崎学術出版社 †

著作権処理の都合上、この場所に挿入されていた図を省略させていただきます。

<http://darkwing.uoregon.edu/~adoption/studies/HarlowMLE.htm>



(A) 布製と針金製の代理母



(B) 布製の代理母にしがみつく子ザル

Harlow (1958), "The nature of love", *American Psychologist*, 13, p675, figure 4, p679, figure 14,

下山晴彦(1998)『教育心理学〈2〉発達と臨床援助の心理学』, pp48, 図2.2, 東大出版会

早期経験の影響メカニズム

・ 早期経験からの影響経路

① 高次レベルの影響経路

心理行動的制御メカニズム(e.g. 内的作業モデル)

② “隠れた”影響経路

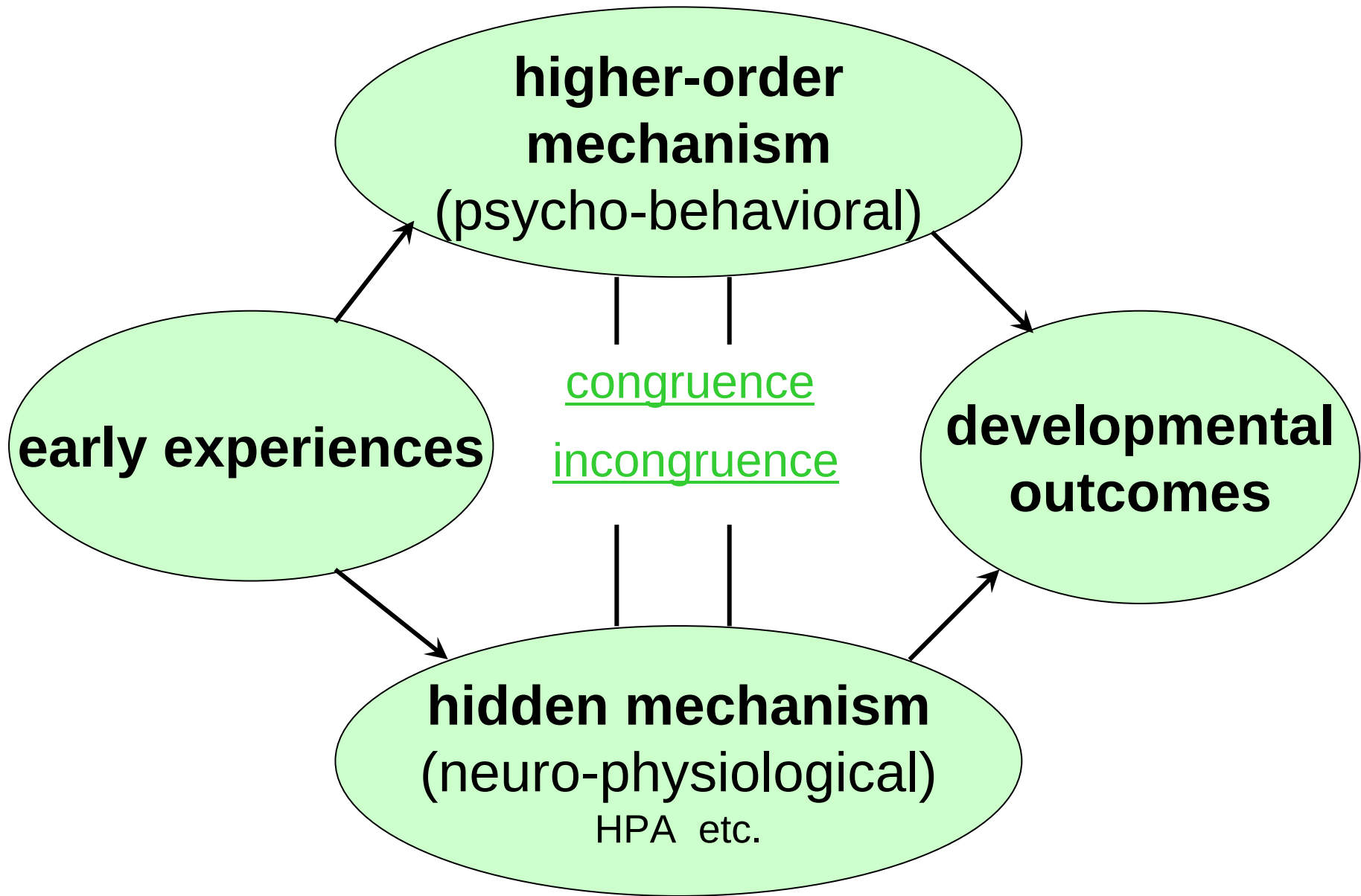
神経-生理学的基礎

生理的ストレスセンサー / 恒常性制御回復機構

進化論的適応メカニズム

ライフヒストリー理論 (Total Life Fitness)

早期経験の質に応じたトレードオフ



Attachment and Loss

著作権処理の都合上、この場所に挿入されていた図を省略させていただきます。

• アタッチメント理論＝

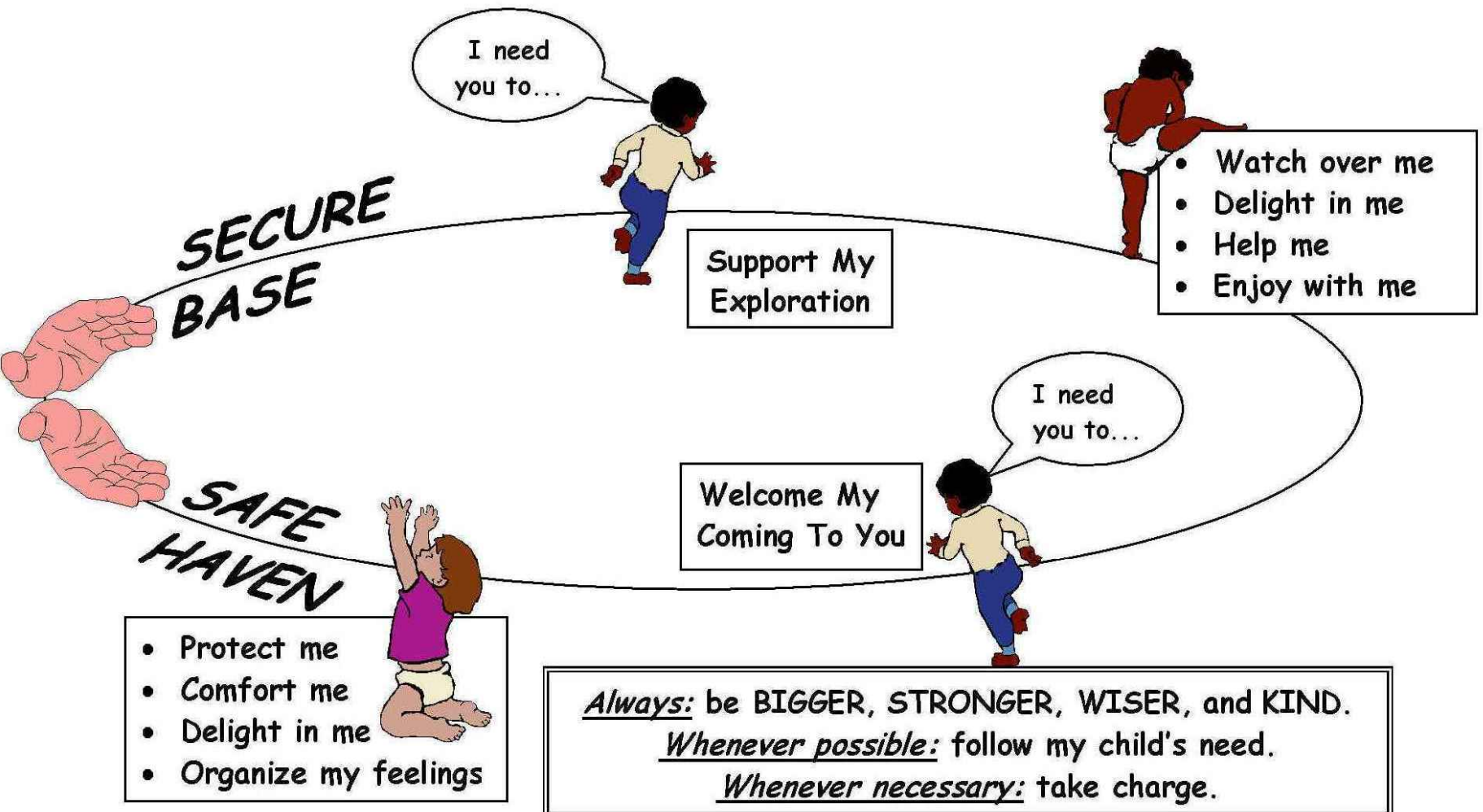
母子関係および親子関係の理論

関係性とパーソナリティに関する生涯発達理論

- **Attachment and Loss**
- felt security and anxiety / fear / grief
- 特定個体との近接を通じた情動制御（主観的安全感）→ 人格の組織化・長期的適応
- 特定のアタッチメント対象との緊密な関係性
→ 生涯一貫して重要であり続ける
- 高齢期も例外ではない
配偶者との死別・Social Convoyの変化の影響

CIRCLE OF SECURITY

PARENT ATTENDING TO THE CHILD'S NEEDS



- 対象喪失が心身に残す傷→生涯を通して甚大
- 精神的麻痺→渴望・思慕→精神的秩序の崩壊
/ 絶望→立て直し
- 否認→怒り→心理的取引→絶望→受容

Holmes&Rahe(1967),“The Social Readjustment Rating Scale” , *Journal of Psychosomatic Research*, Vol. 11, p. 213-218.

谷口幸一 佐藤真一（2007）『エイジング心理学 老いについての理解と支援』,p29,表2-3北大路書房

順位	出来事	生活変化 単位値	順位	出来事	生活変化 単位値
1	配偶者の死	100	23	息子や嫁が家を離れる	29
2	離婚	73	24	姻戚とのトラブル	29
3	夫婦別居生活	65	25	個人的な輝かしい成功	28
4	拘置、拘留、または刑務所入り	63	26	妻の就職や離職	26
5	肉親の死	63	27	就学・卒業・退学	26
6	けがや病気	53	28	生活条件の変化	25
7	結婚	50	29	個人的な習慣の変更	24
8	解雇	47	30	上司とのトラブル	23
9	夫婦の和解調停	45	31	仕事時間や仕事条件の変化	20
10	退職	45	32	住居の変更	20
11	家族の病気	44	33	学校をかわる	20
12	妊娠	40	34	レクリエーションの変化	19
13	性的障害	39	35	協会活動の変化	19
14	新たな家族成員の増加	39	36	社会活動の変化	18
15	職業上の再適応	39	37	約230万円以上の抵当(借金)	17
16	経済状態の変化	38	38	睡眠習慣の変化	16
17	親友の死	37	39	姻戚づきあいの回数の変化	15
18	転職	36	40	食習慣の変化	15
19	配偶者と口論の回数の変化	35	41	休暇	13
20	約230万円以上の抵当(借金)	31	42	クリスマス	12
21	担保、貸付金の損失	30	43	ささいな違法行為	11
22	仕事上の責任の変化	29			

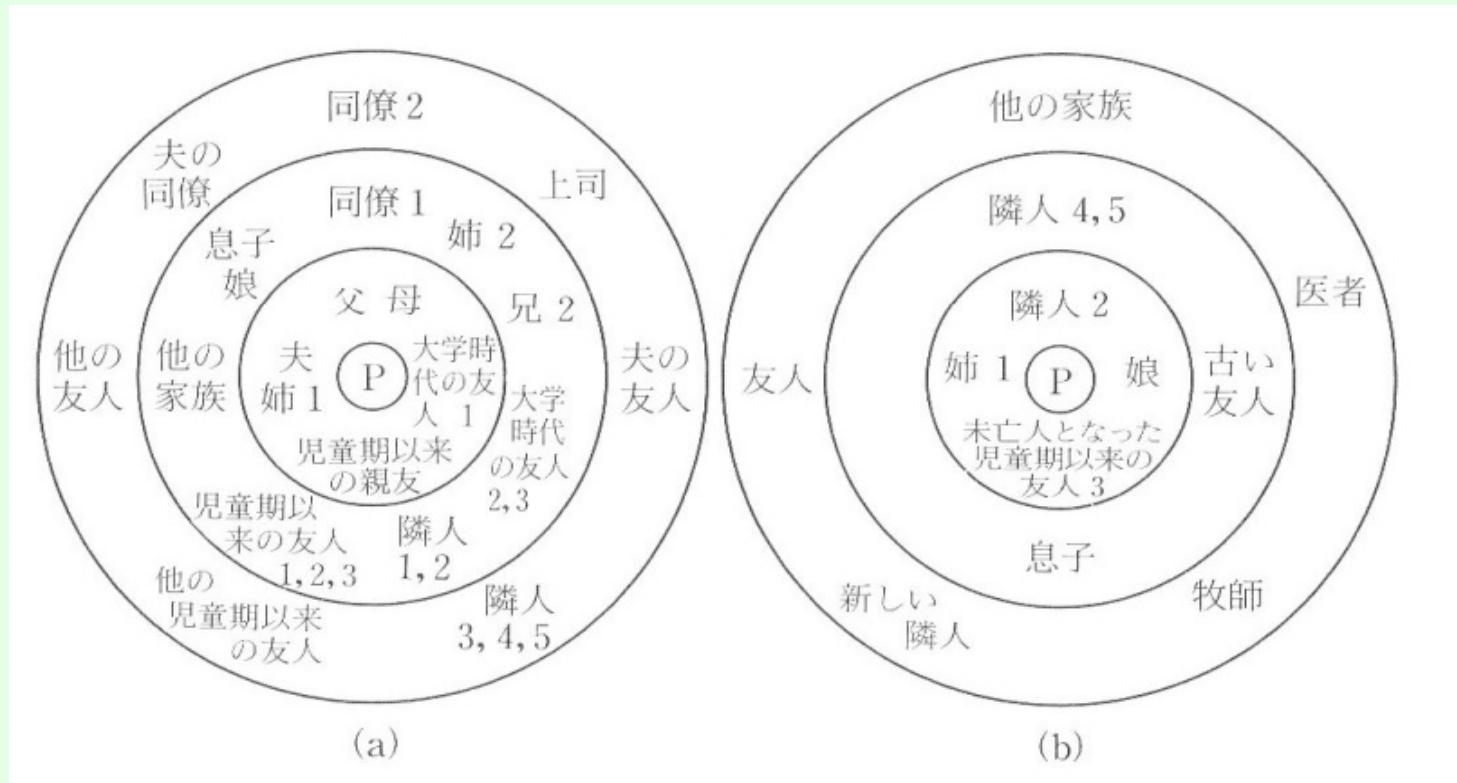


配偶者との死別前後の抑うつ

Norris, Fran H.; Murrell, Stanley A(1990),"Social support, life events, and stress as modifiers of adjustment to bereavement by older adults",*Psychology and Aging*, Vol 5(3), Sep 1990. pp. 429-436. の表を元に教員が図を作成)†

著作権処理の都合上、この場所に挿入されていた図を省略させていただきます。

死別後の感情経験の推移
(Jacob et al.,1988)



ソーシャル・コンボイの変化（35歳→75歳）

Kahn, K.L. & Antonucci, (1980) Convoys over the life course: Attachment, roles and social support. In P.B. Baltes & O.G. Brim, Jr. (eds.), "Life-span development and behavior, vol.3", pp254-286, Academic Press

無藤隆 久保ゆかり 遠藤利彦(1995)『現代心理学入門2 発達心理学』, pp198, 図11.8, 岩波書店

- 人の適応→この今だけに規定される訳ではない：
過去からの連綿たる連なり(弾力性と脆弱性)
- 米独を中心とする長期縦断研究→中年期にまで及ぶアタッチメントの連続性を解明
- 高齢者の適応性も→それ以前との関連を問わなければ十分に理解できない
- 介護・被介護→バーンアウト・心理的負債感など
- 現在のストレスやサポートあるいはコーピング・スキル等だけでは説明し得ない
- アタッチメントの歴史性を考慮する必要性

- I. 発達観の見直し
- II. 生涯発達心理学とは何か？
- III. 生涯発達心理学の代表的な研究デザイン
- IV. 発達の連続性と変化
- V. 生涯発達に影響を及ぼす諸要因
- VI. 生涯発達の諸理論
- VII. サクセスフル・エイジングとは何か？
- VIII. 生涯発達心理学の課題

I. 発達観の見直し

「**発達**」(development)

→心身全般の時間的变化

「**成長**」(growth)

→主に身体面の変化

「**加齢**」(ageing)

→主に中高年期以降の変化

「**成熟**」(maturation)・「**発生**」(ontogeny)

→主に遺伝的要因に由来する変化

「**学習**」(learning)

→環境要因・自律的活動に由来する変化

- 発達 (development) : 包みを開ける・内に在るものが展開する
元来「成熟」に近い概念→展開しきったら後は終わり
- 従来の発達心理学
→成熟し完成体になるまでの期間(乳幼児期～青年期)を扱う
- 「発達心理学」＝「児童心理学」
→ピアジェの知的発達論・フロイトのパーソナリティ発達論
- 成人期: 完成期・発達停止期 中高年期: 発達下降期・衰退期
→「山なりカーブ」の発達観
 - ・心身機能の衰退 ・経済基盤の弱化
 - ・社会的関係の縮小 ・人生の目標の喪失
- 暗くて魅力のない中高年期というイメージが広くまた根深く定着

- 中高年期をめぐる社会通念と実態の乖離
明るく充実した有能な中高年への着目
- 高齢・超高齢社会の到来→社会的要請
- 人生の激変を余儀なくされるケースへの着目
- 発達心理学内部からの疑念：幼児期決定論に対する疑念・生物学主義に対する疑念 etc.
ライフ・サイクルおよびライフ・コースという見方
- 乳幼児期研究からの前方向視的関心と高齢期研究からの後方向視的関心の邂逅

II. 生涯発達心理学 とは何か？

- ①完成体の否定・発達の遍在性
- ②発達の多次元・多方向性
- ③獲得と喪失の表裏一体性(「赤の女王」)
- ④発達の生涯に亘る可塑性
- ⑤発達の文化性・歴史性
- ⑥発達の弁証法的過程(標準・歴史・個別)
- ⑦学際的アプローチの必要性
- ⑧自己主体性(self-agency)の復権
- ⑨発達の世代継承性

(Baltes et al.,1980,1987,1992)

生涯発達心理学の理論的観点

Baltes,P.B. (1987)."Theoretical propositions of life span developmental psychology:On the dynamics between growth and decline",*Developmental Psychology*,23,611-626

やまだようこ(1995) 無藤隆・やまだようこ(共編) 講座生涯発達心理学1ー生涯発達心理学とは何か』,p70,表4.1,金子書房

概 念	各 観 点 の 内 容
生涯発達	個体の発達生涯にわたる過程である。どの年齢も発達の性質を規定するうえで特別の地位をもたない。発達の全過程を通じて、また生涯のあらゆる段階において、連続的(蓄積的)な過程と不連続的(革新的)な過程の両方が機能している。
多方向性	個体の発達を構成する変化の多方向性は、同一の領域内においてすら見出される。変化の方向は行動のカテゴリーによってさまざまである。さらに同じ発達の变化の期間において、ある行動システムでは機能のレベルが向上する一方で、別の行動システムでは低下する。
獲得と喪失としての発達	発達の過程は、量的増大としての成長といった、高い有効性の実現へと単純に向かう過程ではない。むしろ発達は、全生涯を通じてつねに獲得(成長)と喪失(衰退)とが結びついて起こる過程である。
可塑性	個人内での大きな可塑性(可変性)が心理学的発達において見出されている。したがって個人の生活条件と経験とによって、その個人の発達の道筋はさまざまな形態をとりうる。発達研究の重要なポイントは、可塑性の範囲とそれを制約するものを追究することである。
発達が歴史に埋め込まれていること	個体の発達は、歴史的文化的な条件によってきわめて多様でありうる。いかにして個体の(年齢に関係した)発達が進むかということは、その歴史上の期間に存在している社会文化的条件と、その条件がその後いかに推移するかによって著しく影響される。
パラダイムとしての文脈主義	個々の発達のどの特定の道筋も、発達の要因の3つのシステムの間の相互作用(弁証法)の結果として理解することができる。3つの要因とは、年齢に伴うもの、歴史に伴うもの、そしてそのような規準のないものである。これらのシステムのはたらきは、文脈主義に結びついたメタ理論的な原理によって特徴づけられる。
学際的研究としての発達研究	心理学的発達は、人間の発達に関係する他の学問領域(たとえば人類学、生物学、社会学)によってもたらされる学際的文脈の中で理解される必要がある。生涯発達の見方を学際的態度に対して開いておく理由は、「純粹主義的」な心理学的観点だけでは、受胎から死に至る行動発達のごく一部分しか描き出すことができないからである。

著作権処理の都合上、この場所に挿入されていた図を省略させていただきます。

モデル名	イメージ	価値	モデルの特徴	発達 の ゴール	重要な 次元	おもな理論家
A 成長		考える	子どもからおとなになるまでの獲得、成長を考える。成人発達の可塑性を考えない	おとな 均衡化 獲得	身体 知能 行動	ピアジェ フロイト ウェルナー ワロン
B 熟達		考える	以前の機能が基礎になり、生涯通して発達しつづける安定性と一貫性を重視する	熟達 安定	有能さ 力 内的作業 モデル	バルテス ボウルビィ
C 成熟		考える	複数の機能を同時に考える。ある機能を喪失し、別の機能が成熟すると考える	成熟 知恵 統合	有能さ 徳	バルテス エリクソン レヴィンソン
D 両行		考える	複数の機能を同時に考える。ある観点からみるとプラスであり別の観点からみるとマイナスとみなす	特定できない (個性) 化 (両性) 具有	両価値 変化プロセス 意味	(ユング)
E 過程		考えない	人生行路（コース）や役割や経歴（キャリア）の年齢や出来事による変化過程を考える	考えない	エイジング 社会的役割 人生イベント	ハヴィガースト エルダー
F 円環		考えない	回帰や折り返しを考える。もとへもどる、帰還による完成	「無」にもどる 完成	意味 回帰	

生涯発達の様々なモデル

やまだようこ(1995)『無藤隆・やまだようこ(共編), 講座生涯発達心理学1ー生涯発達心理学とは何か』,p58,図4.1,金子書房+

Developmental psychology.



From the cradle to the grave.

Life-span Developmental Psychology

1980～ スローガンから現実へ

The description, explanation, modification
of

within-individual change / stability

from birth to death

and

between-individual differences / similarities

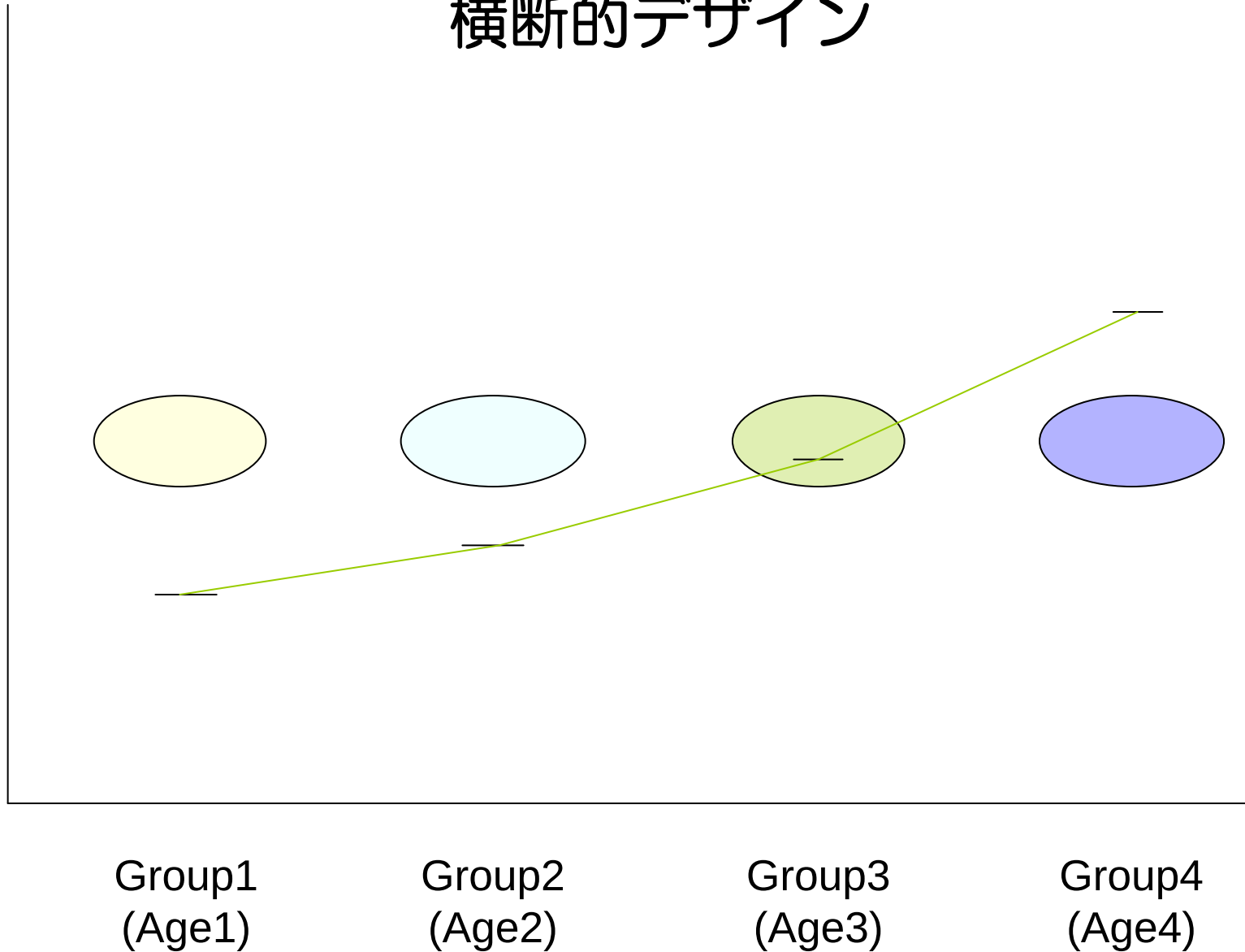
in within-individual changes.

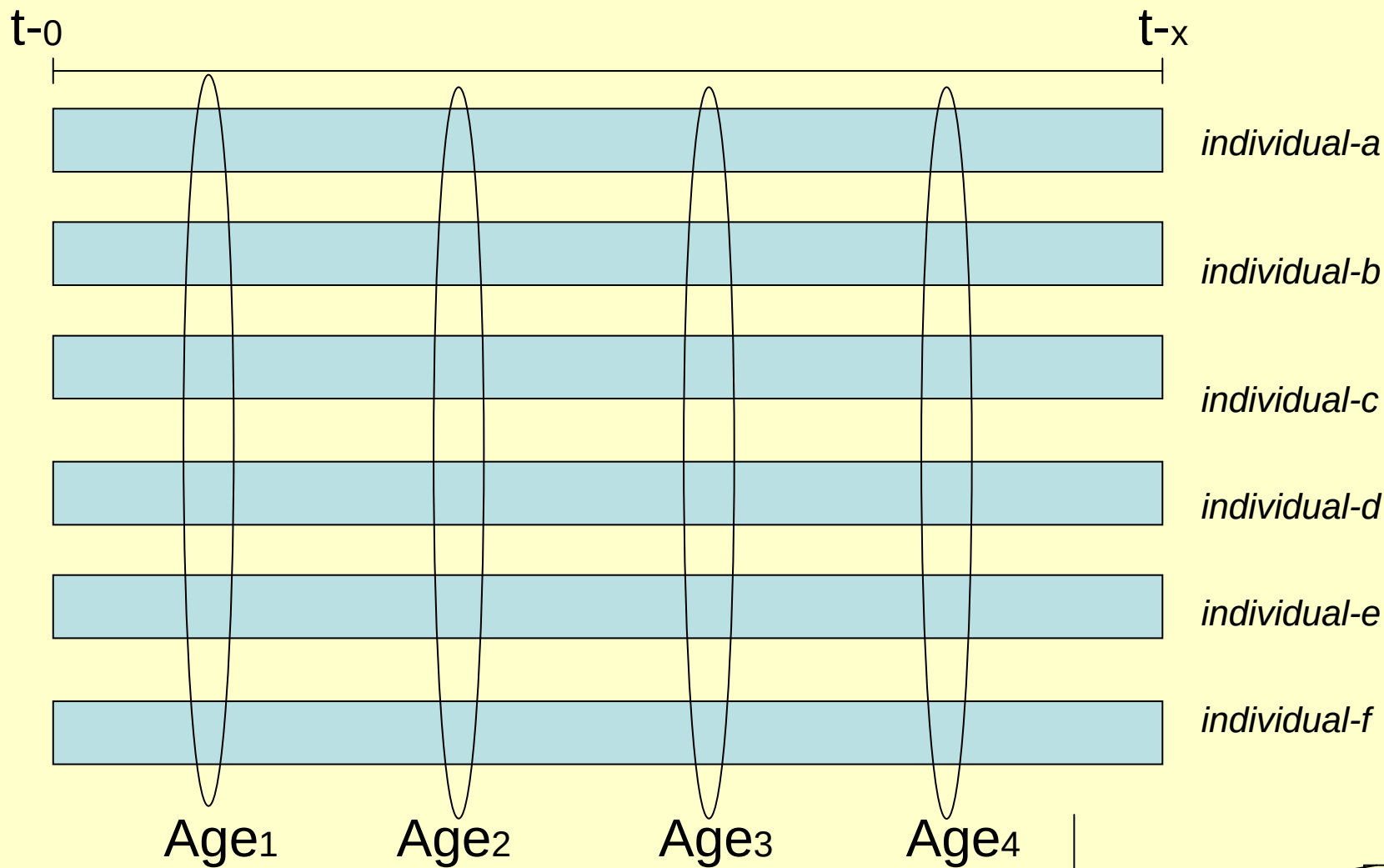
(e.g. Baltes et al., 1980)

III. 生涯発達心理学 の研究デザイン

- **横断法**: 一時点に異年齢集団を同時調査
→「**衰退**」を強調
- **縦断法**: 特定コホートを時間的に追跡・遡及
→「**維持**」を強調 (サバイバー・練習効果)
時間の向き: プロスペクティブとレトロスペクティブ
- **時代差法**: 複数コホートを同年齢時に調査
- **系列法**: 横断法と縦断法を合体
→ **シャイエの最も効率的なデザイン**
発達の普遍性・歴史性・集団特異性等

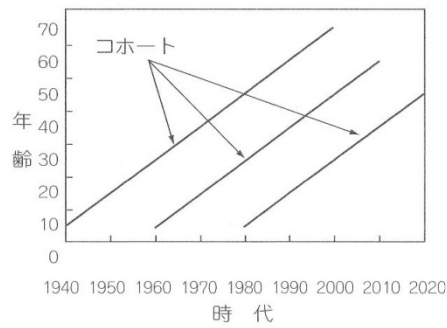
横断的デザイン



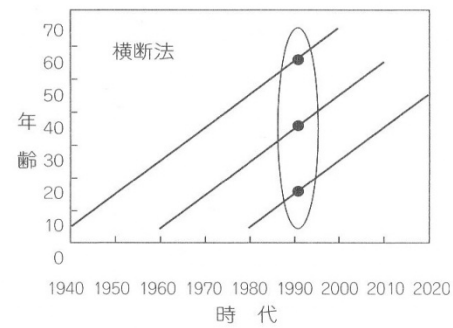


縦断的デザイン

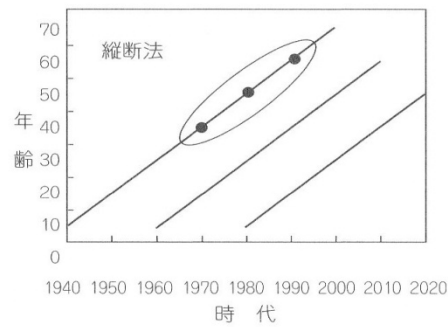




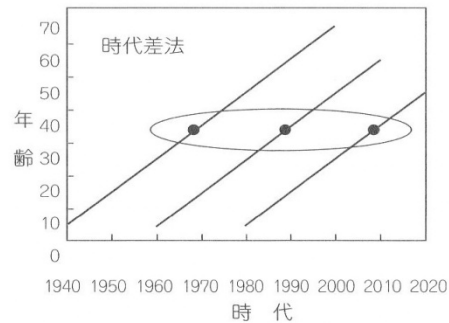
(a) 年齢・時代・コホート



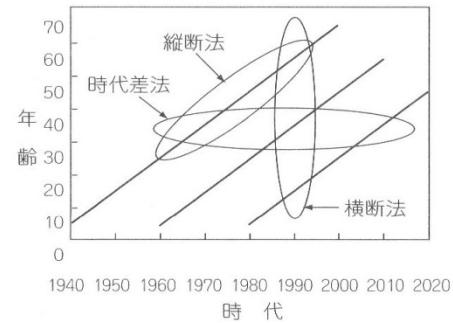
(b) 横断法



(c) 縦断法



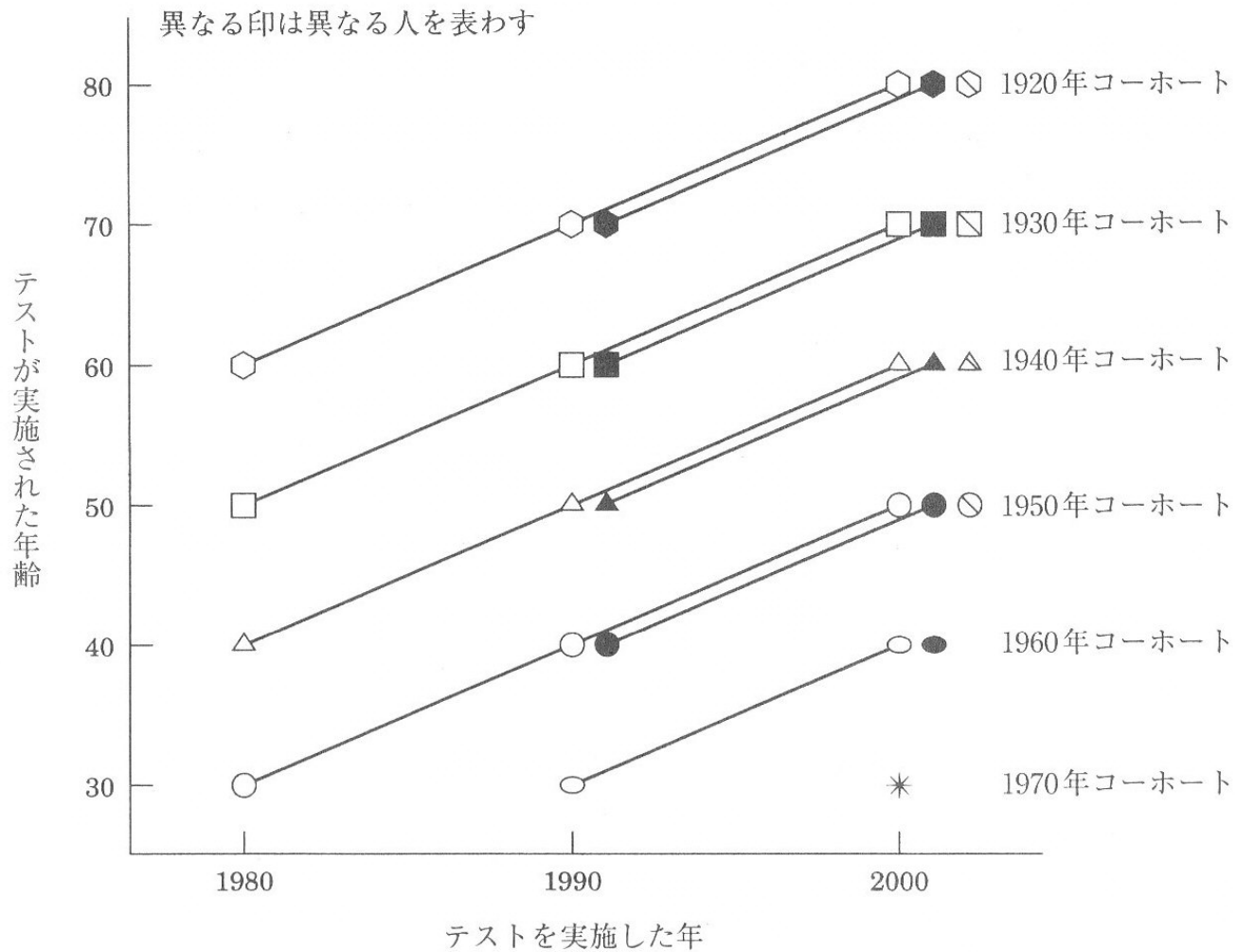
(d) 時代差法



(e) 横断法・縦断法・時代差法

様々な生涯発達の研究法

著作権処理の都合上、この場所に挿入されていた図を省略させていただきます。



系列法(Schaieの最も効率的なデザイン)

(K.Warner Schaie Sherry L.Willis著 岡林秀樹訳(2006)『成人発達とエイジング』,ブレーン出版)†

IV. 生涯発達における 連続性と変化

a) 絶対値 / 平均値の連続性 / 変化

同一変数の集団平均値を異年齢間で比較
[横断・縦断]

b) 差異 / 順序性の連続性 / 変化

同一変数あるいは関連変数の集団内順位を
異年齢間で比較(相関)[縦断]

同型的連続性と異型的連続性

c) 構造の連続性 / 変化

ある特性の構造的特徴を異年齢間で比較
(因子分析等)[横断・縦断]

a) 絶対値 / 平均値の連続性 / 変化

同一変数の集団平均値を異年齢間で比較
[横断・縦断]

b) 差異 / 順序性の連続性 / 変化

同一変数あるいは関連変数の集団内順位を
異年齢間で比較(相関)[縦断]

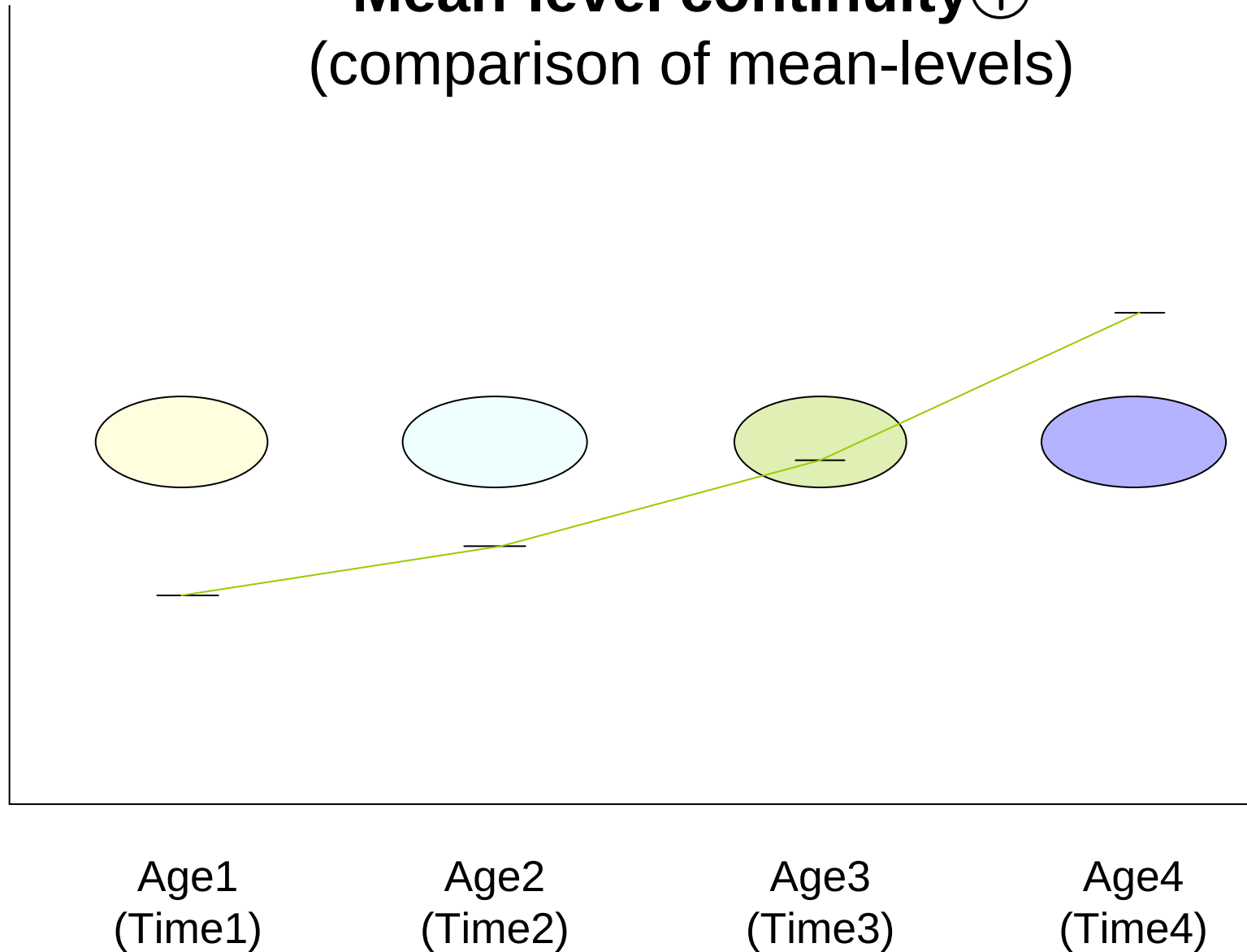
同型的連続性と異型的連続性

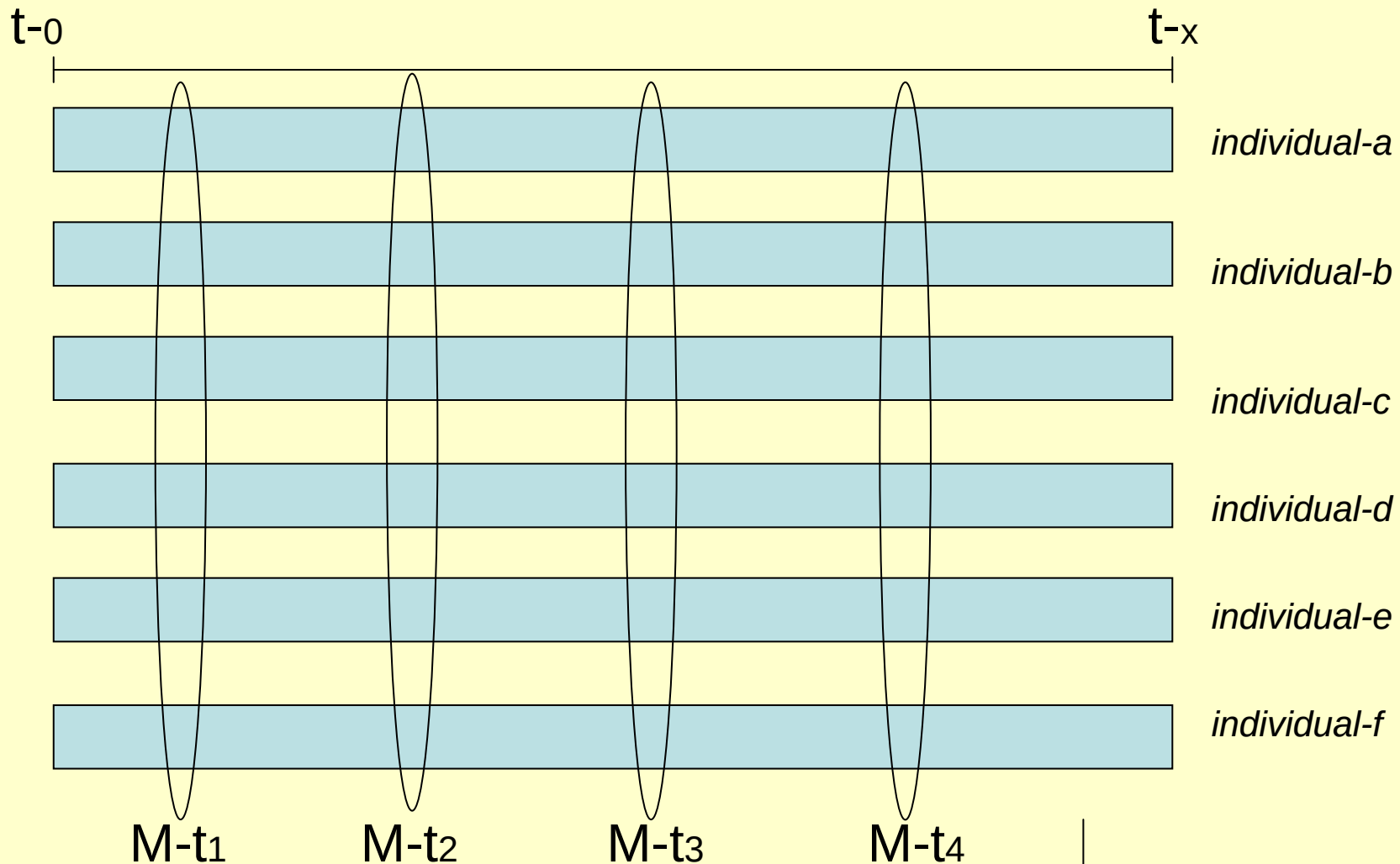
c) 構造の連続性 / 変化

ある特性の構造的特徴を異年齢間で比較
(因子分析等)[横断・縦断]

Mean-level continuity^①

(comparison of mean-levels)

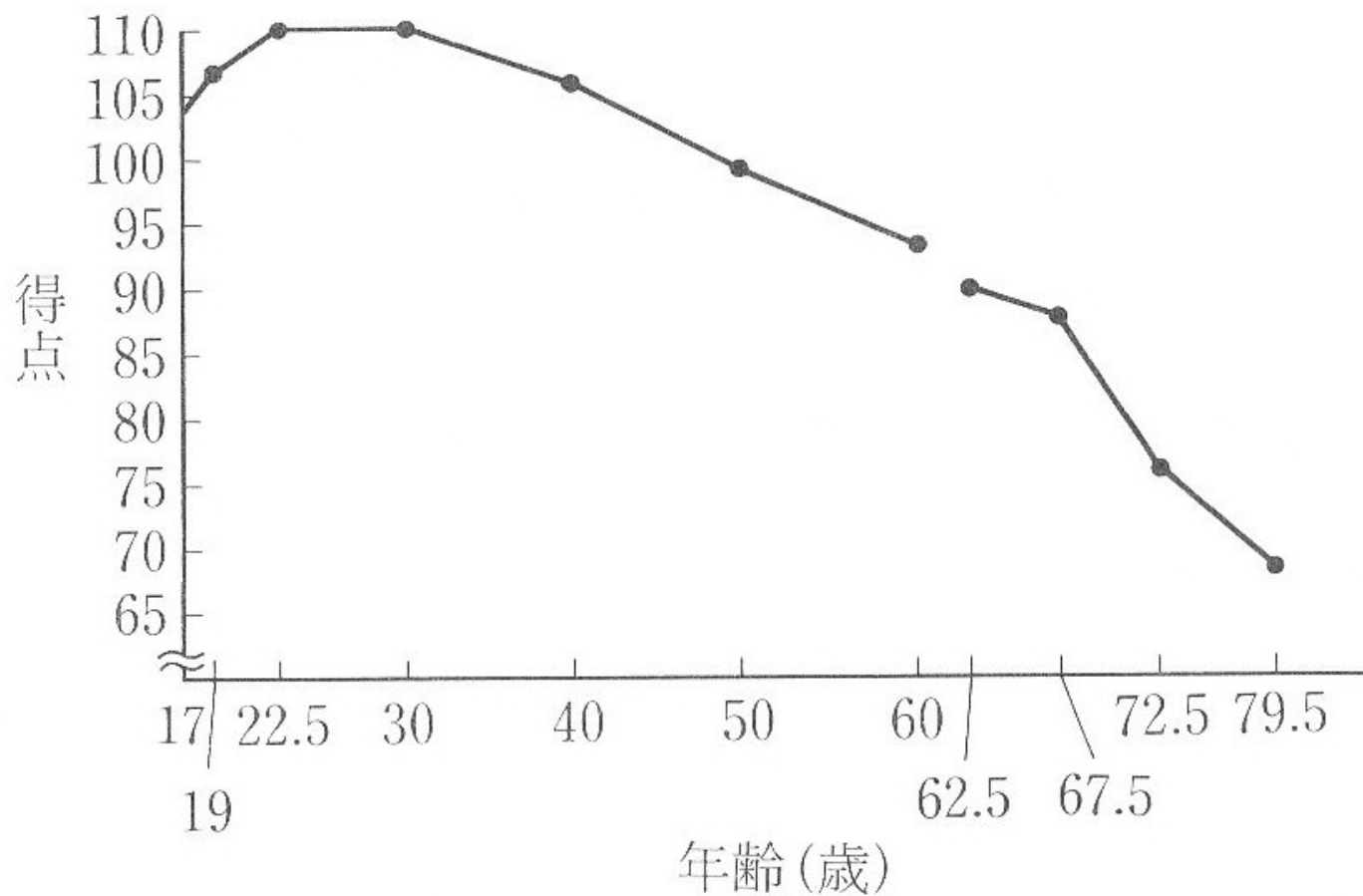




Mean-level continuity②
(comparison of mean-levels)



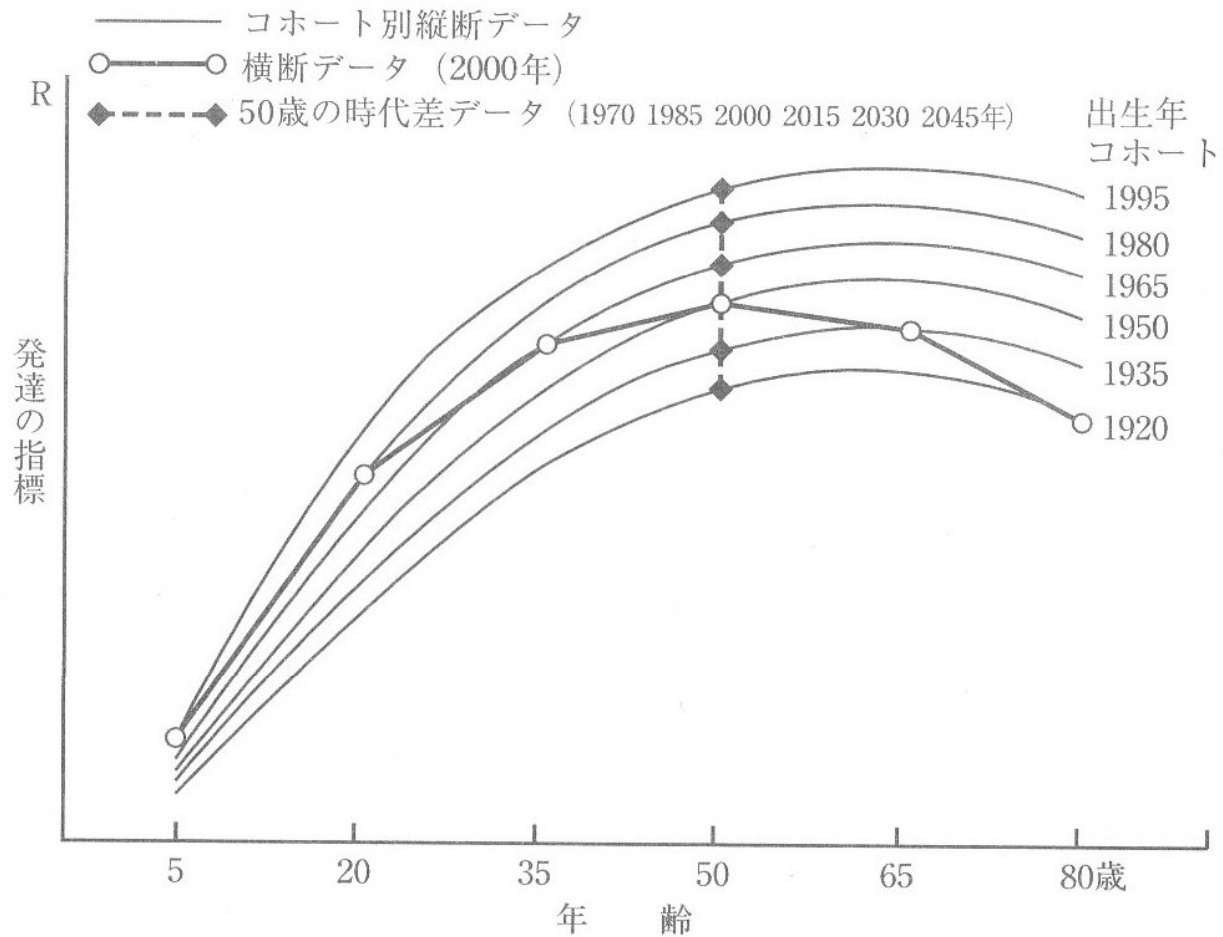
- 古典的研究の多くが横断的デザインをもって絶対値 / 平均値の連続性 / 変化を扱う
→ 山なりカーブ・中高年期以降の衰退を過度に印象づける
- 縦断的・系列的デザインによる再検討
→ 実態は長期プラトーの後、微減衰
大病を境に大幅な減少傾向



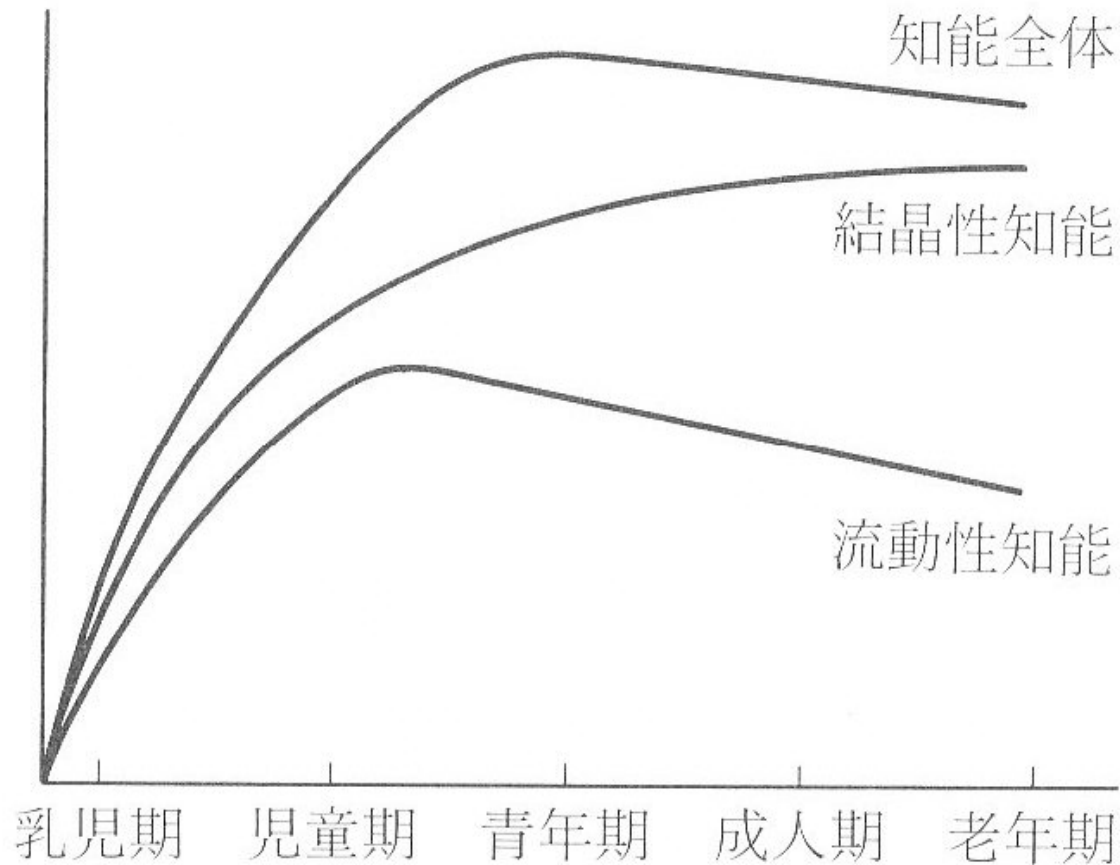
知能の衰退曲線

Doppelt, J.E. & Wallace, W.L. (1955), "Standardization of the Wechsler Adult Intelligence Scale for older persons.", *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51, 312-330

無藤隆 久保ゆかり 遠藤利彦 (1995) 『現代心理学入門2 発達心理学』, 岩波書店, 図11.3, pp185



縦断法、横断法、時代差法



流動性知能と結晶性知能の発達的変化のモデル

Horn, J.L. (1970), "Organization of data on life-span development of human abilities". In L.G. Goulet & P.B. Baltes (eds.), "Life-span developmental psychology: Research and theory", pp. 424-467. Academic Press

無藤隆 久保ゆかり 遠藤利彦 (1995) 『現代心理学入門2 発達心理学』, p. 186, 図 11.4, 岩波書店

生涯発達心理学における知能

- 知能の一般因子の存在→確証されつつある
- Spearman的知能観の復権？(cf. 多重知性)
- 知能の発達曲線にまつわる誤謬→修正
- **Schaieのシアトル研究**(縦断+横断→「最も効率的なデザイン」)
- **結晶性知能(pragmatics)→維持[30歳代にピーク]**
- **流動性知能(mechanics)→緩衰[25歳前後にピーク]**
- **心身の疾病なく知的環境にあれば変化少**
- Salthouse: 年齢の影響→一般知能で最大
- コホート差→Flynn効果 (原因？)
- Bell Curve論争→知能による社会較差

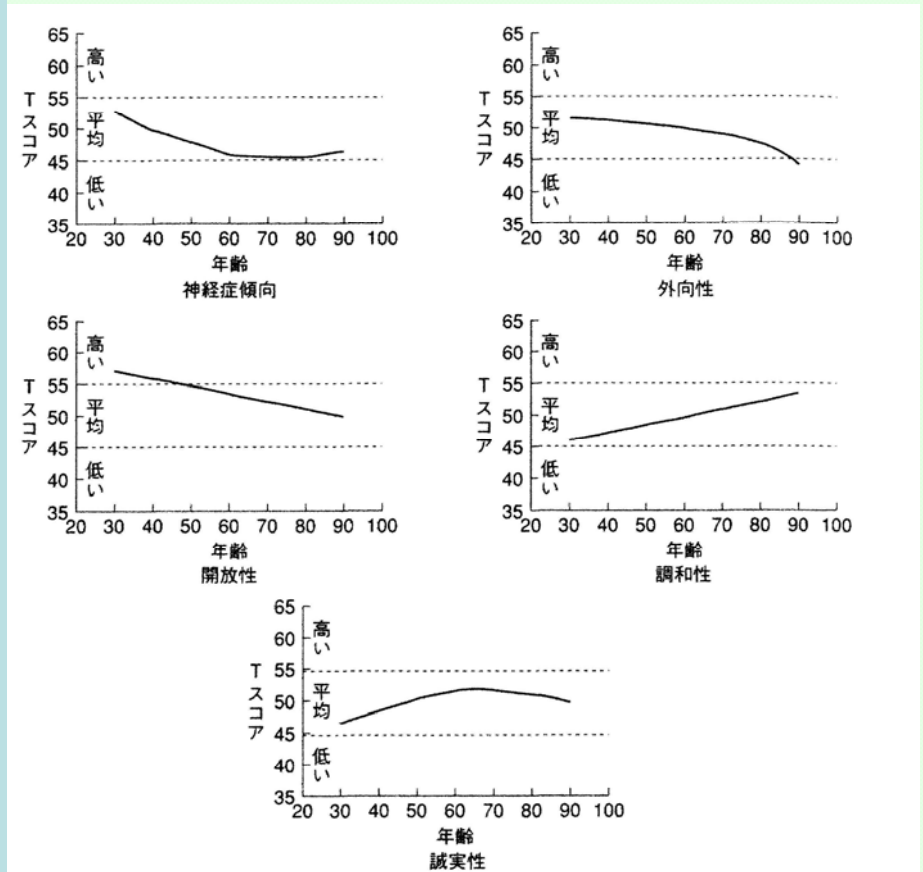
• 加齢による変化の特質

"Wisdom and Successful Ageing" (Baltes et al.,1992)

- ①流動性知能など一部の心の機構は加齢に伴い減退する
- ②加齢に伴いバランスシート上の＋の値が減り－の値が増える
- ③高齢期には潜在的能力が多く残されている(認知的可塑性と英知)
- ④知識と認知的語用論が認知的機構の減退を補償し得る
- ⑤高齢期の自我は尊厳を獲得し維持するための弾力性あるシステムであり続ける
- ⑥加齢の進行に伴い大きな個人差(非均質性)が生じる
- ⑦加齢については健常、最適、病理の区別をする必要あり

- パーソナリティの連続性と変化：
絶対値 / 平均値によるアプローチ (Big 5)
- **O**penness to experience (経験への開放性)：
加齢とともに減少
- **C**onscientiousness (誠実性)：
加齢とともに増大するが高齢期にはやや減少
- **E**xtraversion (外向性)：加齢に伴い減少
- **A**greeableness (調和性)：加齢に伴い増大
- **N**euroticism (神経症傾向 / 情緒的不安定性)：
加齢とともに減少するが高齢期後半にやや増大
- 高齢期：外向性の高さと情緒的不安定性の低さ
→ 幸福感の高さ・孤独感の低さと関連

著作権処理の都合上この場所に挿入されていた図を省略させていただきます。



5人格特性の年齢比較(下仲ら,2001)

縦断研究による年齢比較

Terracciano ,A.,et al.,(2005) .“Hierarchical linear modeling analyses of the NEO-PI-R scales in the Baltimore Longitudinal Study of Aging”.*Psychology and Aging*,20.(3),493-506 50

権藤恭之(2008)『高齢者心理学』,p138,図8.2,朝倉書店

- こうした変化パターンにはあまり文化差が認められない

→標準的な社会的時計の関与？（結婚、家族形成、キャリアの確立など）

→生物学的（進化論的要因）の関与？

繁殖成功・包括適応度に寄与する変化

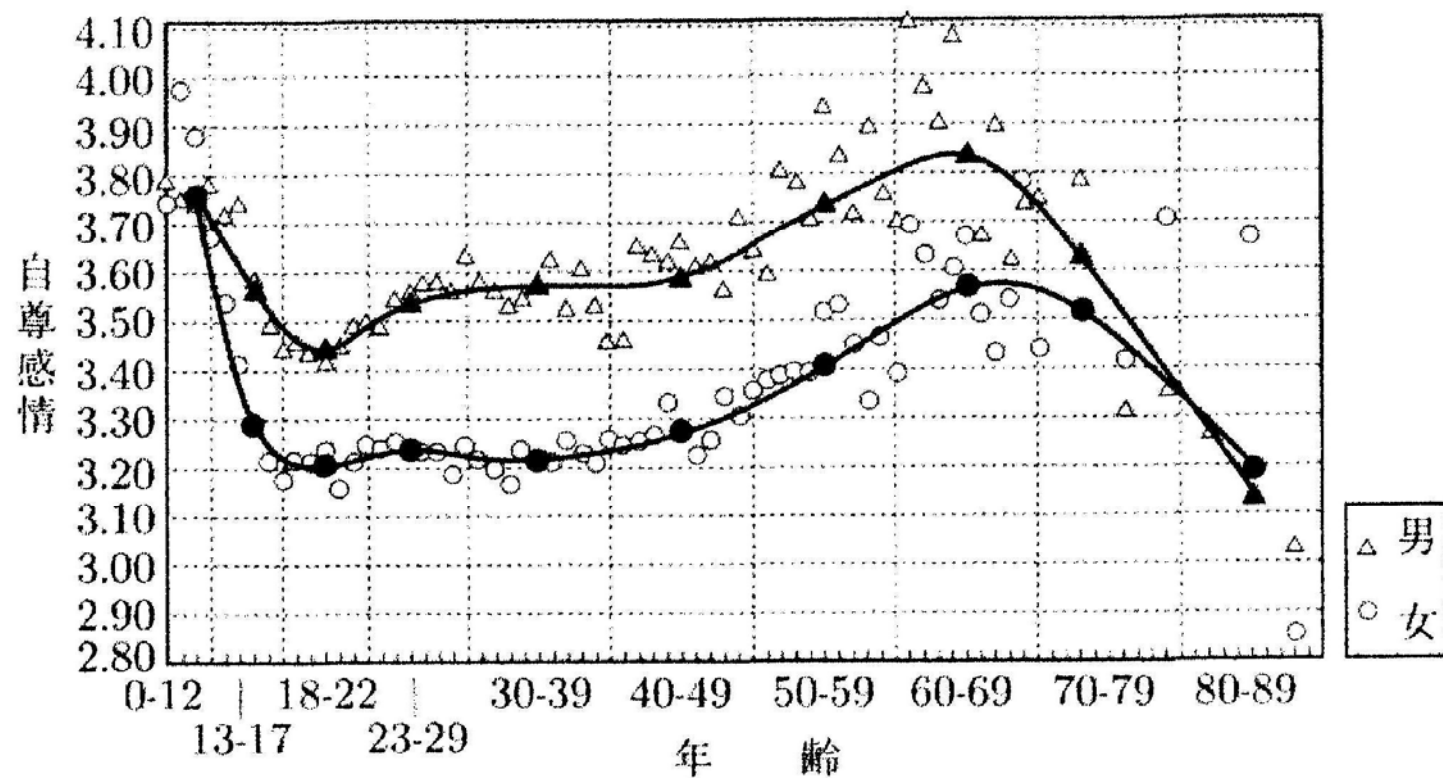
幼少期→成長

若年期→配偶関係の確立

成人期中期以降→養育環境の充実・維持

Rosenberg(1965)の自尊感情尺度(宗像訳)

- ①だいたいにおいて自分に満足している。
- ②時々、自分がてんでだめだと思う。
- ③自分には良いところがたくさんあると思う。
- ④たいていの人がやれる程度にはやれる。
- ⑤私には自慢するところがあまりないと思う。
- ⑥時々、まったく自分が役立たずだと感じる。
- ⑦少なくとも他人と同じくらいの価値にあると思う。
- ⑧もう少し自分を尊敬できたらよいと思う。
- ⑨だいたい自分は何をやってもうまくいかない人間のように思える。
- ⑩すべて良いほうに考えようとする。



自尊感情の発達曲線

Robins, Richard W.; Trzesniewski, Kali H.; Tracy, Jessica L. (2002) "Global self-esteem across the life span.", *Psychology and Aging*, Vol 17(3), pp. 423-434.

下仲順子 (2007) 『高齢期の心理と臨床心理学』, p88, 図6-6, 培風館

a)絶対値 / 平均値の連続性 / 変化

同一変数の集団平均値を異年齢間で比較
[横断・縦断]

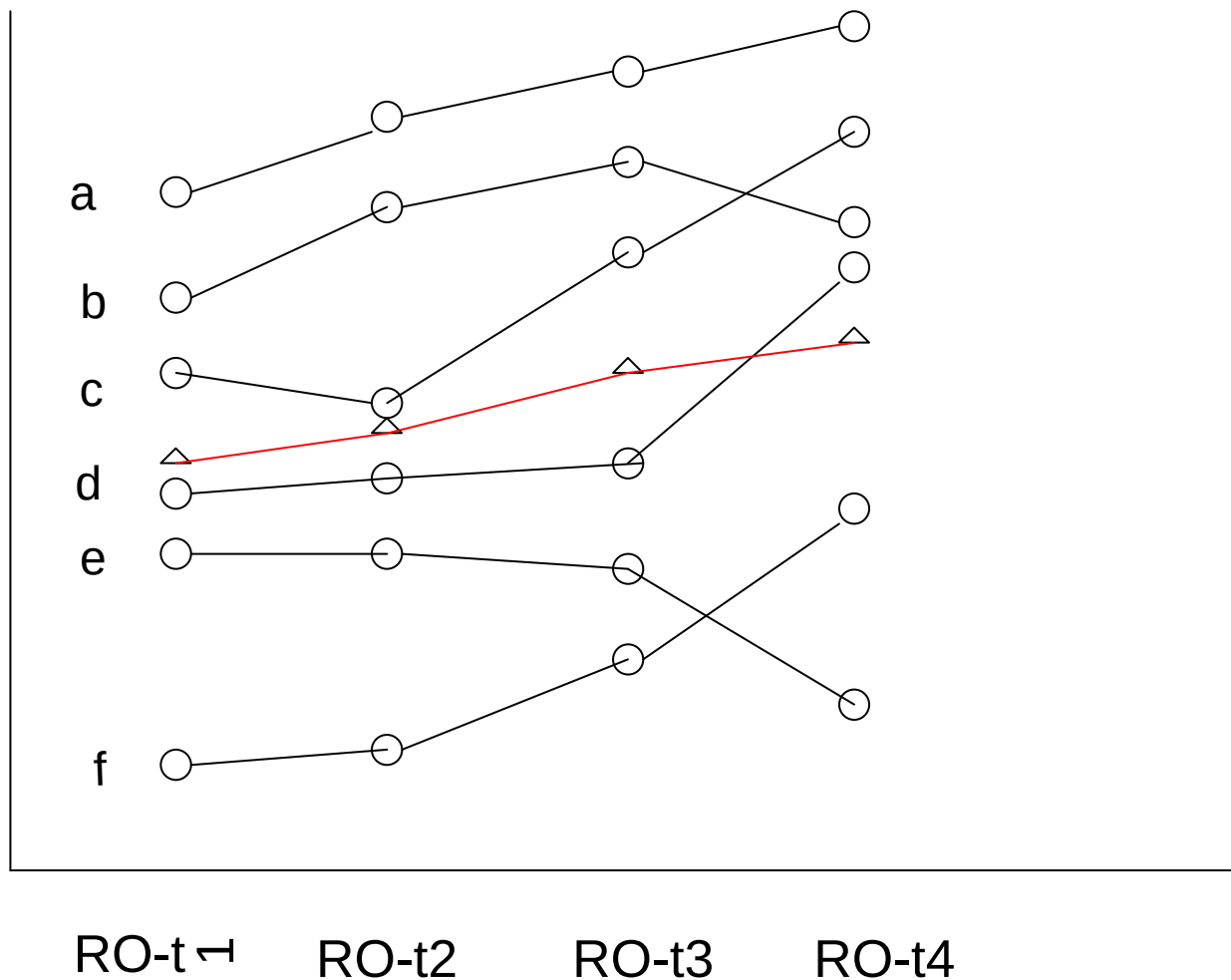
b)差異 / 順序性の連続性 / 変化

同一変数あるいは関連変数の集団内順位を
異年齢間で比較(相関)[縦断]

同型的連続性と異型的連続性

c)構造の連続性 / 変化

ある特性の構造的特徴を異年齢間で比較
(因子分析等)[横断・縦断]



Rank-order continuity
(correlation of rank-orders)

- パーソナリティの連続性(安定性)と変化:
差異 / 順序性によるアプローチ
 - Roberts & Delvecchio(2000):
152研究についてメタ分析
 - 各発達期ごとに数理的操作を施し、一律に
6.7年間隔での相関を算出
- 加齢とともに個人差は変動しにくくなる(集団
内の序列的位置が固定化)
- 乳幼児期→0.31 児童期→0.43 大学生時→0.54 30歳前後→0.60
50～70歳→0.74
- 環境の変化の影響を受けにくくなる？

a)絶対値 / 平均値の連続性 / 変化

同一変数の集団平均値を異年齢間で比較
[横断・縦断]

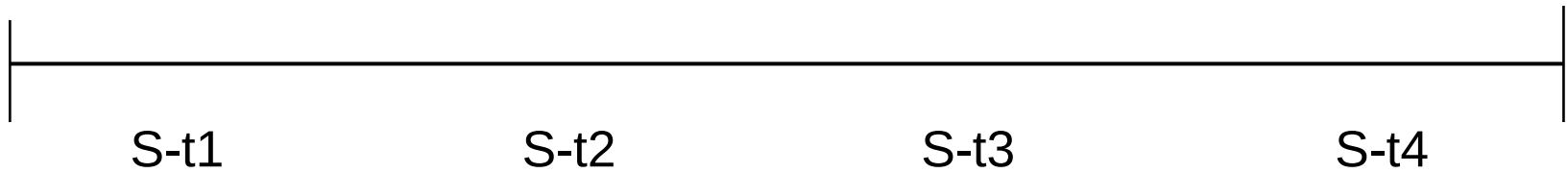
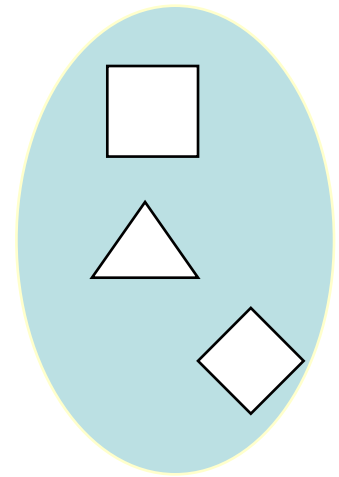
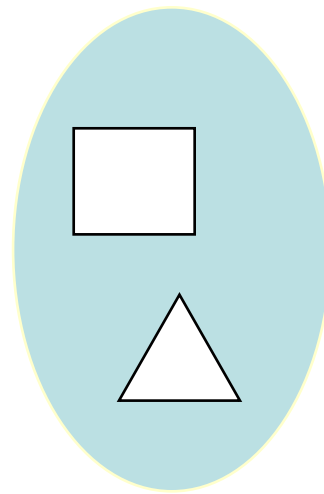
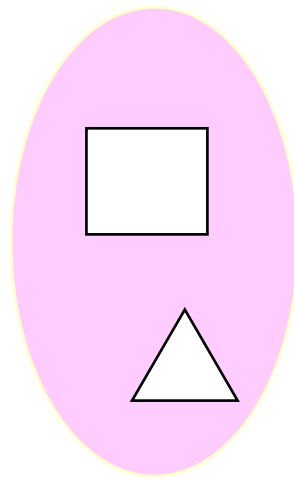
b)差異 / 順序性の連続性 / 変化

同一変数あるいは関連変数の集団内順位
を異年齢間で比較(相関)[縦断]

同型的連続性と異型的連続性

c)構造の連続性 / 変化

ある特性の構造的特徴を異年齢間で比較
(因子分析等)[横断・縦断]



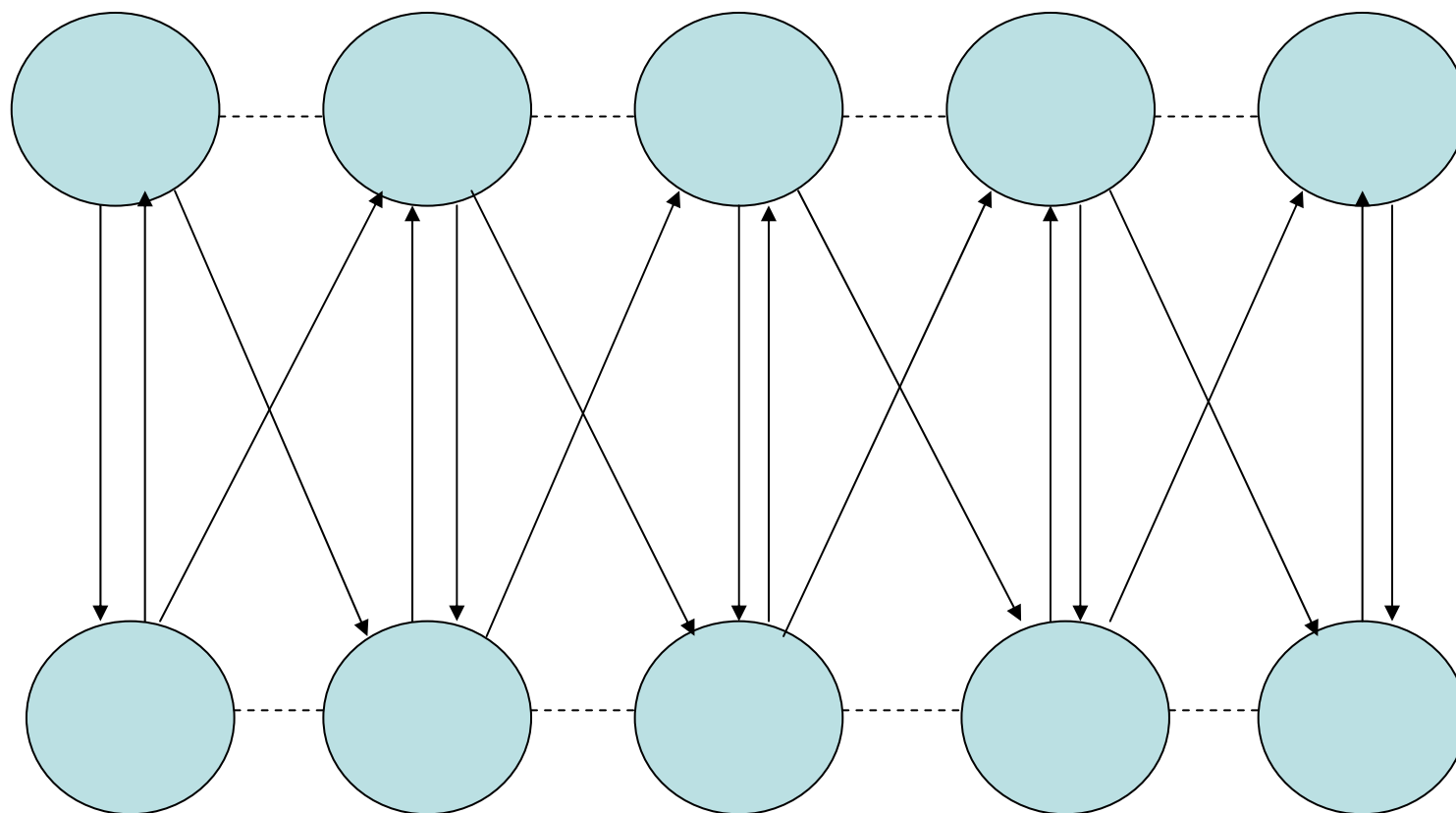
Structural continuity

V. 生涯発達に影響を 及ぼす要因

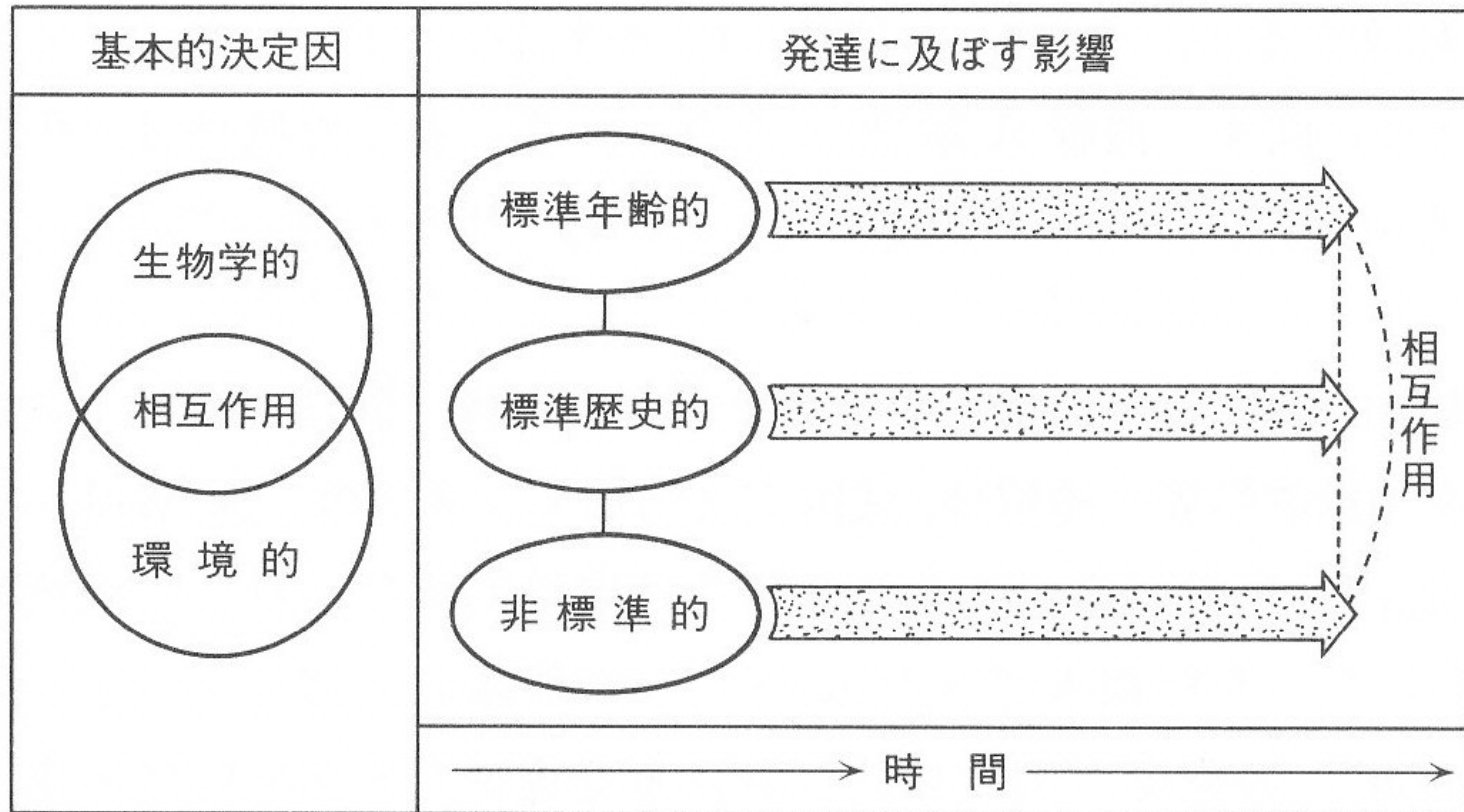
- 発達を駆動する主要因(Baltes et al.,1980)
遺伝的要因 × 環境的要因
両者の相互規定的作用
- a)標準年齢的要因:生物学的個体発生要因＋標準的な社会化要因(social clock)
- b)標準歴史的要因:ある特定世代・コホート全体が経験する歴史・社会・文化的要因
- c)非標準的要因:個人特有の特異なライフ・イベントに関連する個別的要因(＋遺伝的差異)

養育者
環境

子ども



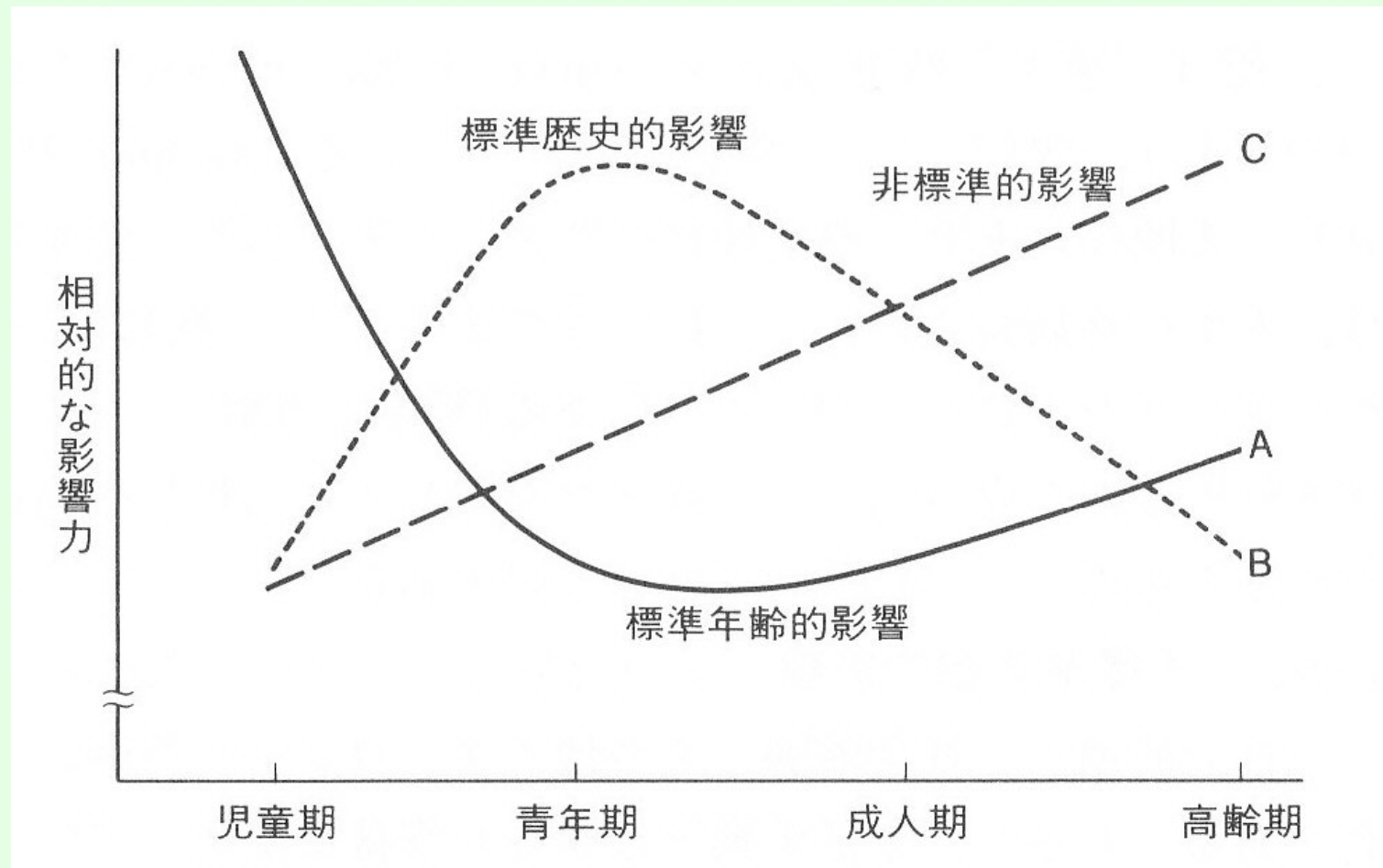
発達時間



生涯発達に影響を及ぼす主要因

Baltes ,P.B.et al., (1980).”Life-span developmental psychology”, *Annual Review of Psychology*,31,65-100

村田孝次(1989)『生涯発達心理学の課題』, p51,図3,培風館



相対的な影響力の発達の变化

Baltes, P.B. et al., (1980). "Life-span developmental psychology", *Annual Review of Psychology*, 31, 65-100

村田孝次(1989)『生涯発達心理学の課題』, p51, 図4, 培風館

- 社会・文化的文脈の重要性 (e.g. ブロンフェンブレンナーの生態学的システム論)
- グレン・H・エルダー
→ 様々なアーカイブ・データを再分析
「大恐慌時代の子ども」: 1929年10月 米国
未曾有の経済不況「大恐慌」(10年間)
- 1920～1921年オークランド生の子ども(小学校時代)のその後(成人期まで)
- 社会階層と剥奪の程度に特に着目

著作権処理の都合上、この場所に挿入されていた図を省略させていただきます。

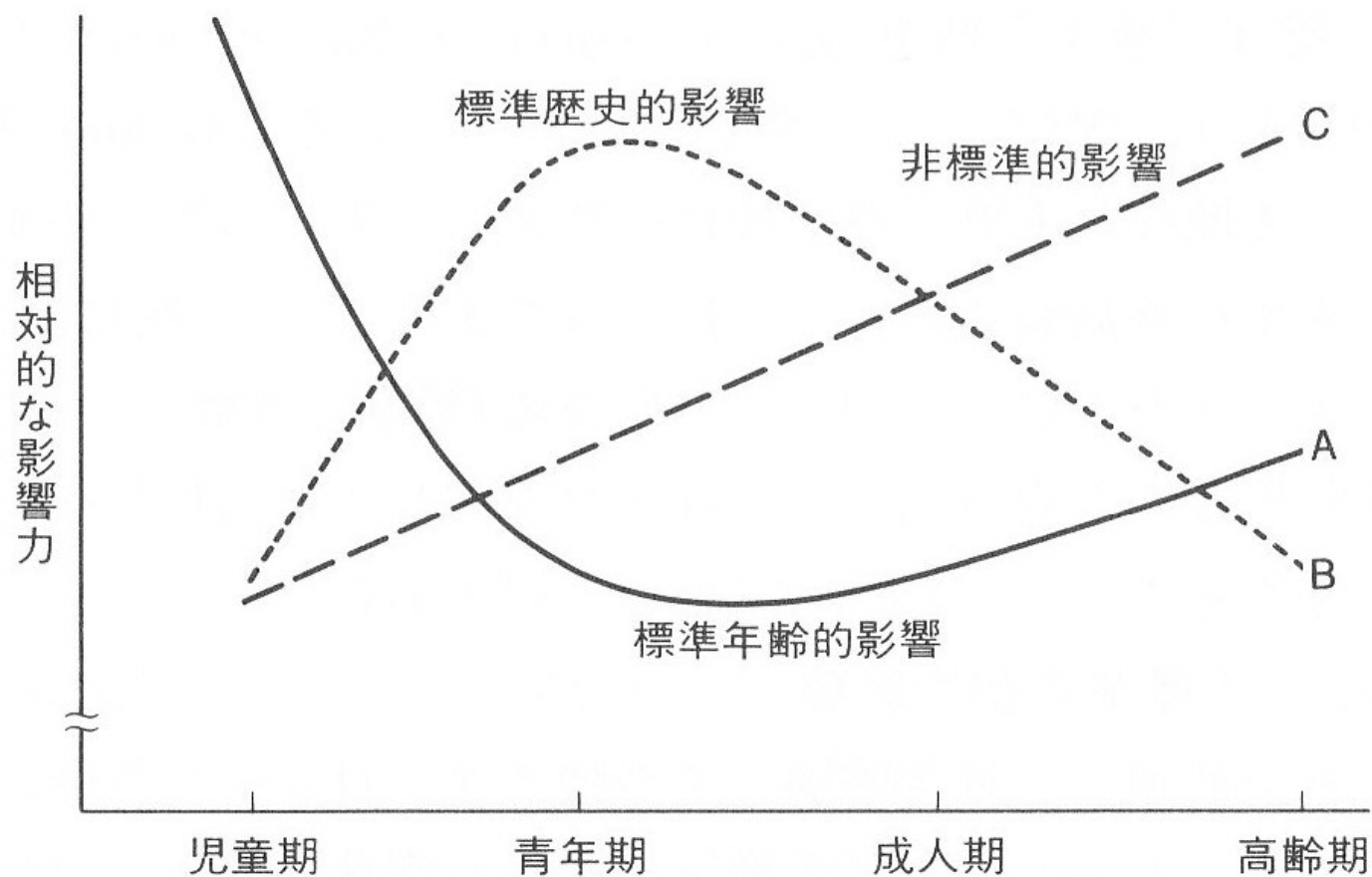
ブロンフェン布伦ナー(Bronfenbrenner,1985)の生態学的発達論 (Santorock,1995)
[下山,1998]



グレン・H・エルダー著；本田時雄 [ほか] 訳(1997) 新装版『大恐慌の子どもたち』,明石書店 卄

- 青少年期に多くの外在化問題(癩癪・暴力)と内在化問題(社会的引きこもり・抑うつ)
- 子どもの問題行動に対する父親の影響大(経済的破綻が招来した問題)
- 子ども時代の問題行動と成人期の職業上の不安定の関連→低い社会経済的地位にある男女で高い
- 女性では子ども時代の問題行動→さして成人後の夫婦関係・結婚生活等に関連せず
- 恐慌を経験した際の年齢および社会経済的地位によって影響は様々 etc.

- グリュック・グリュック～サムソン・ローブ
対照群を設けた非行常習少年群に対する追
跡調査(1930～)
- カスピらによるニュージーランド・ダニーディン
研究(1972～)
- NICHDによる保育と発達の研究(1989～)
- 米独を中心に展開しているアタッチメントに関
する長期縦断研究
- 日本における「失われた10年」(バブル崩壊)
の意味は？



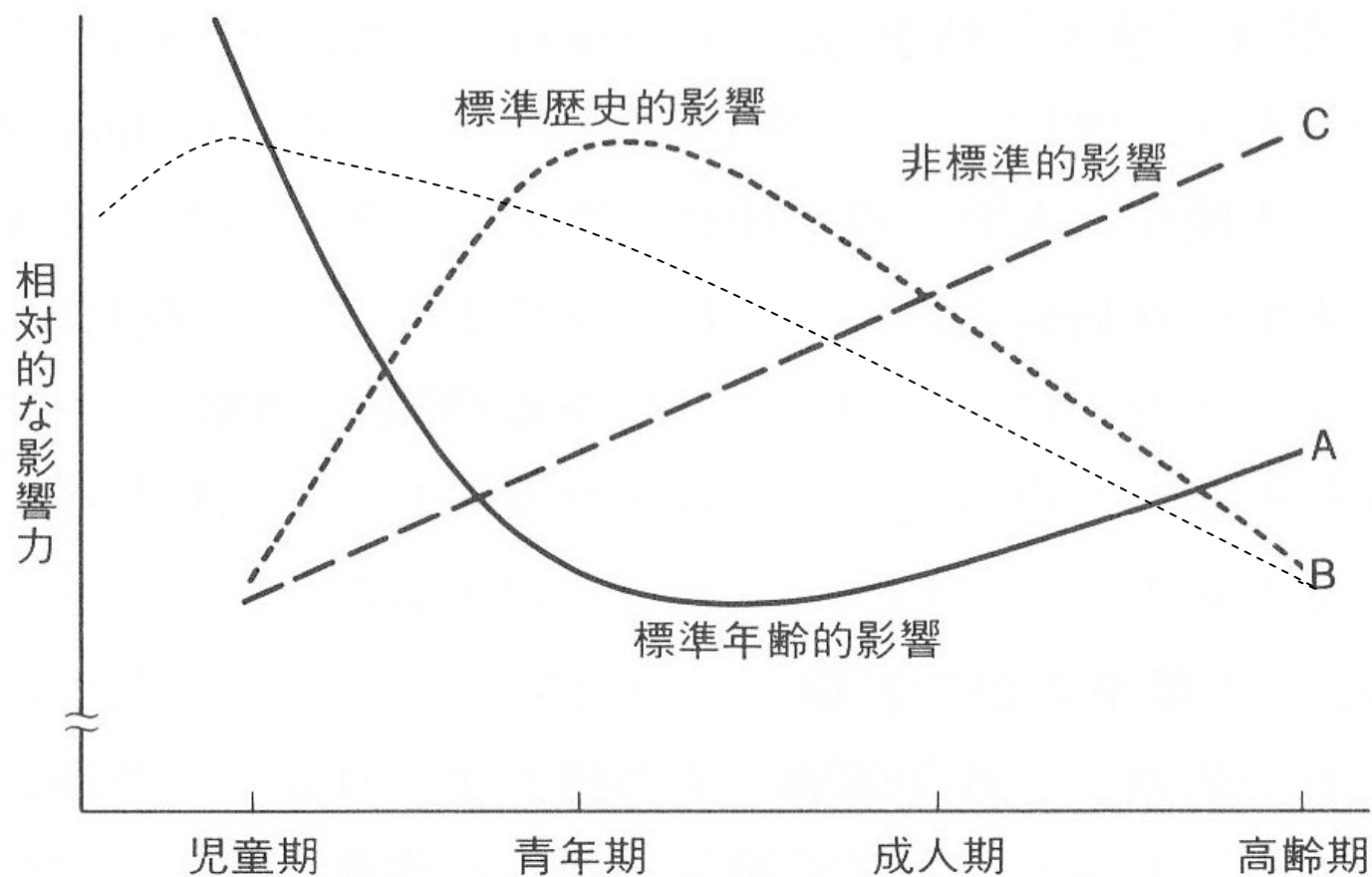
相対的な影響力の発達的变化

Baltes, P.B. et al., (1980). "Life-span developmental psychology", *Annual Review of Psychology*, 31, 65-100

村田孝次(1989)『生涯発達心理学の課題』, p51, 図4, 培風館

- エルダーの研究

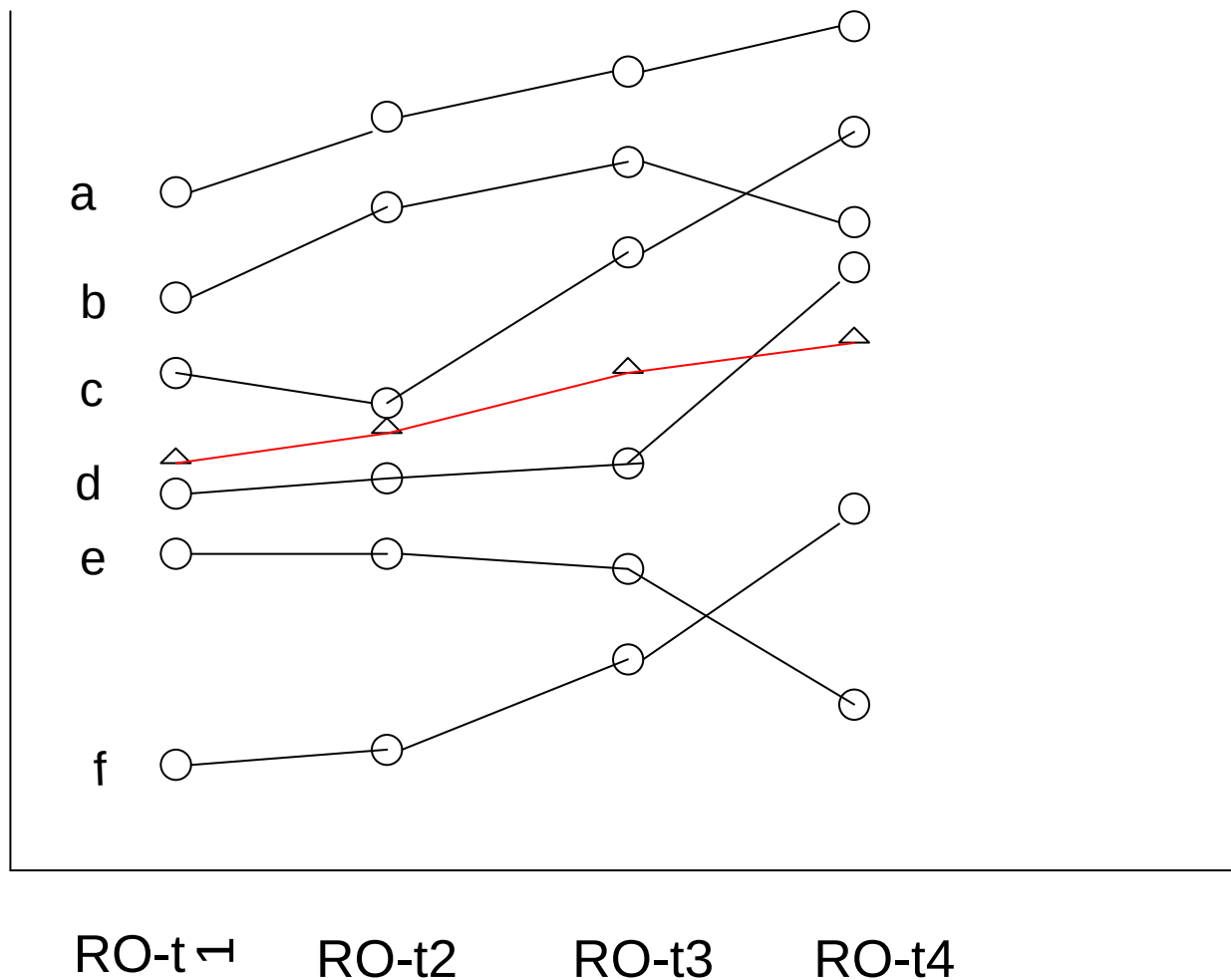
- 恐慌のダメージ→当時、児童期・思春期だったオークランド・サンプルよりも当時、乳幼児期だったバークレイ・サンプルの方が大きい



相対的な影響力の発達的变化

Baltes, P.B. et al., (1980). "Life-span developmental psychology", *Annual Review of Psychology*, 31, 65-100

村田孝次(1989)『生涯発達心理学の課題』, p51, 図4, 培風館



Rank-order continuity
(correlation of rank-orders)

- パーソナリティの連続性(安定性)と変化:
差異 / 順序性によるアプローチ
 - Roberts & Delvecchio(2000):
152研究についてメタ分析
 - 各発達期ごとに数理的操作を施し、一律に
6.7年間隔での相関を算出
- 加齢とともに個人差は変動しにくくなる(集団
内の序列的位置が固定化)
- 乳幼児期→0.31 児童期→0.43 大学生時→0.54 30歳前後→0.60
50～70歳→0.74
- 環境の変化の影響を受けにくくなる？

- 発達の行動遺伝学が明かす発達のパラドクス
(生涯発達における遺伝と環境)
- 遺伝率: ある特性の表現型における個人差分散を遺伝子型の差異が説明する割合
- 主に双生児をサンプルとして研究(一卵性と二卵性の遺伝的共有率の差異を利用)

行動遺伝学の方法

表現型の個人差分散を

遺伝子型の分散による説明率(遺伝率)と
(相加遺伝＋非相加遺伝)

その残差としての環境の分散による説明率に
(共有環境＋非共有環境)

分割して表現する方法

遺伝

共有環境

非共有環境

- ・ 双生児法 養子法 etc.

遺伝率

＝個別に育てられた一卵性双生児間の相関

＝(一卵性双生児間の相関－

二卵性双生児間の相関) × 2

＝養子で離れたきょうだい間の相関 × 2

＝(きょうだい間の相関－養子間の相関) × 2

- ・ **非共有環境** = 1 － 一卵性双生児間相関

共有環境 = 一卵性双生児間相関 － 遺伝率

著作権処理の都合上、この場所に挿入されていたPlomin Petrill(1997),“Genetic and intelligence:What’s new? ”,*Intelligence*,24 ,p61 Figure 2の画像を省略させていただきます。

- 一卵性双生児グループ(MZ)におけるきょうだい同士が近似している程度→相関(MZ-r)
- MZのきょうだいを近似させている要因
遺伝子がまったく同じだから近似している分(g)
育つ環境が共有されているから近似している分(se)
- 二卵性双生児グループ(DZ)におけるきょうだい同士が近似している程度→相関(DZ-r)
- DZのきょうだいを近似させている要因
遺伝子が平均して半分同じだから近似している分($1/2g$)
育つ環境が共有されているから近似している分(se)

- 例 IQのきょうだい間での近似性(相関)

$$\text{MZ-r} = 0.86 \quad \text{DZ-r} = 0.60$$

$$\text{MZ-r } 0.86 = g + se$$

$$\text{— DZ-r } 0.60 = 0.5g + se$$

$$0.26 = 0.5g$$

$$\times 2 \quad \underline{0.52 = g} \quad (\rightarrow \text{遺伝率})$$

- $se = \text{MZ-r } 0.86 - g \text{ } 0.52 = 0.34$

- 共有されていない環境(nse)→きょうだい間差

$$nse = 1 - \text{MZ-r } 0.86 = 0.14$$

行動遺伝学の様々な形

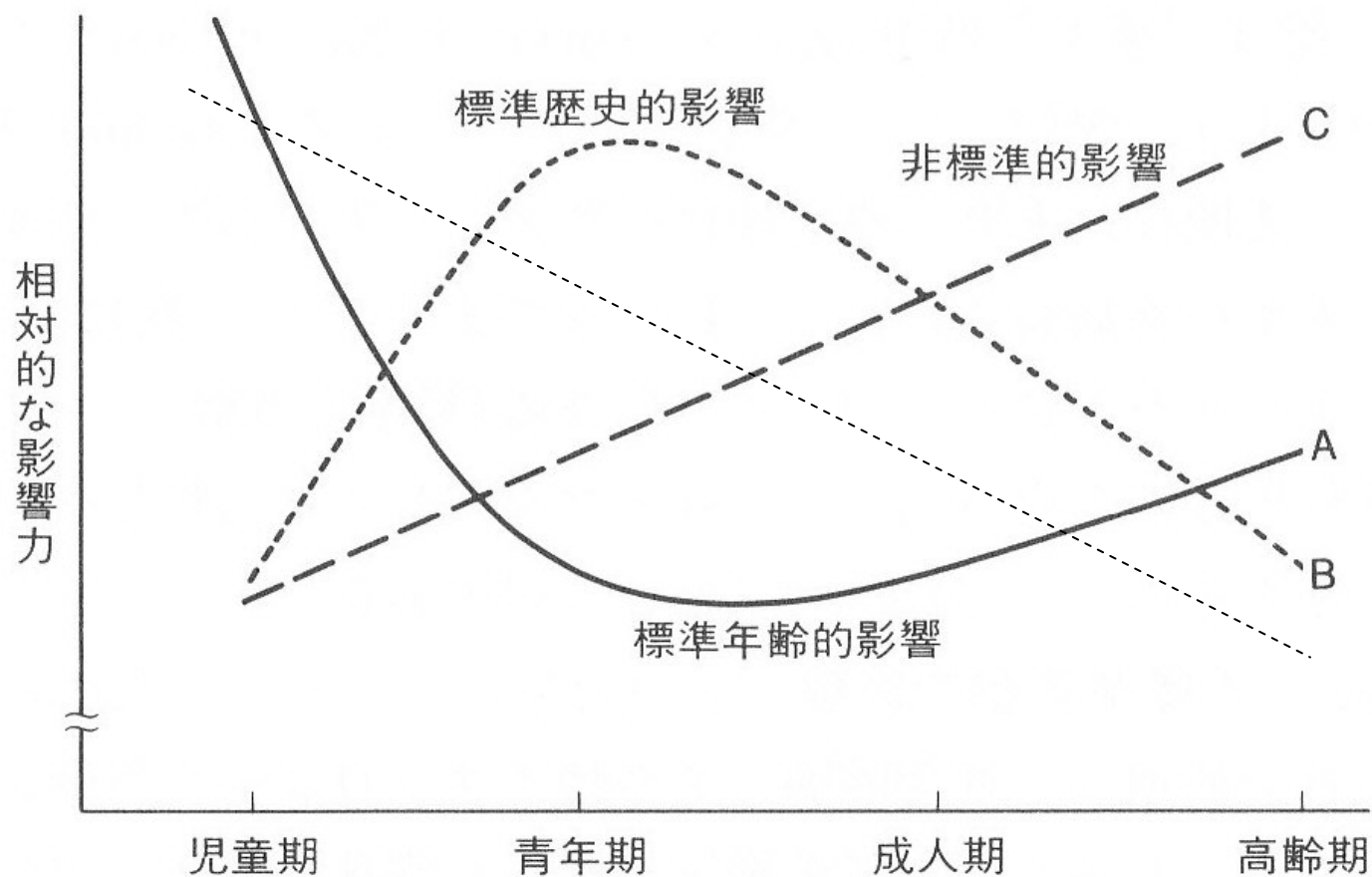
- Quantitative Genetics
- Developmental Genetics
- Multivariate Genetics
- Environmental Genetics
- Molecular Genetics

著作権処理の都合で、この場所に挿入されていた
Science 1997年6月6日号の表紙の写真を省略させていただきます。

著作権処理の都合で、この場所に挿入されていた
Plomin Petrill(1997),“Genetic and intelligence:What’s
new? ”,*Intelligence*,24 ,p61 Figure 3
の図を省略させていただきます。

- 一般的に遺伝率は加齢とともに増大する
(成育環境による説明率は減少する)
 - 学習を蓄積し、成育環境における様々なライフイベントを経験すればするほど環境的要因ではなく遺伝的要因による説明率が上昇するという逆説(←→バルテス?)
 - 人は自律的にふるまえるようになるほど遺伝的素因に沿った環境選択・構築を行う
- niche-picking
 - nature via nurture (nurture via nature)

- 非標準的要因：環境的特異性の影響
- →加齢とともに減少（若年期ほど大きい）
- 非標準的要因：遺伝的特異性の影響
- →加齢とともに増大（高年期ほど大きい）



相対的な影響力の発達的变化

Baltes, P.B. et al., (1980). "Life-span developmental psychology", *Annual Review of Psychology*, 31, 65-100

村田孝次(1989)『生涯発達心理学の課題』, p51, 図4, 培風館を改変

遺伝と環境の非独立性

- “goodness of fit” “transactional” model
→ GとEを基本的に独立のものと見なす

- GとEの本質的・原理的連関

①passive

②reactive

③evocative

④proactive

Niche-picking

within good-enough environment

VI. 生涯発達の諸理論

- **フロイト**の精神分析：パーソナリティの発達に対する幼児期の重要性を強調

←→ **ユング**：40歳代を人生の正午とし人生後半における**内面化**の過程を成長と捉える

- 人生前半の発達→愛と労働による社会的位置の定位
- 人生後半の発達→抑圧してきた内なる自然や真の自己の発見＝**個性化**

- **ビューラー**: 人生を5期に分け、最終期の老年期を**引退と回顧**の時期とする:
- 人は減衰しつつある知力や体力の現状を踏まえながら、なおも可能な限り自己実現を試み、また 自身の人生における達成や成果を内省し、展望する
- **ハヴィガースト**: 各発達期(全6期)ごとに固有の発達課題が存在する
- **老年期の発達課題**: 体力と健康の衰退に対する適応・引退と収入源への適応・配偶者の死に対する適応・同世代との親密な関係性の再確立・社会 / 市民的責務の受容・身体的可動性を維持し日常生活を満足に送るための準備

- **エリクソン**: ハヴィガーストを意識しつつ精神分析の心理・性的発達論に社会・文化的視点を導入
- 普遍的な8つのライフ・ステージを設定したライフ・サイクル論を展開
- ライフ・サイクル: ライフ・ステージを中心に標準の人生移行を考える
←→ ライフ・コース: ライフ・イベントを中心に個別の人生移行を考える

村田孝次(1989)『生涯発達心理学の課題』, p25,表1,培風館†

段階	年齢期間	主要な特徴	認知的段階 (ピアジェ)	心理的段階 (フロイト)	心理・社会的段階 (エリクソン)	道徳性段階 (コールバーグ)
胎児期	受胎から 誕生まで	・身体の発達	—	—	—	—
乳児期	誕生から 約18か月 まで	・移動運動の確立 ・言語の未発達 ・社会的愛着	感覚運動期	口唇期 肛門期	信頼 対 不信	前道徳期 (段階0)
児童前期	約18か月 から約6 歳まで	・言語の確立 ・性役割の獲得 ・集団遊び ・就学「レディネス」 とともにこの段階は 終わる	前操作期	男根期 エディプス期	自律性 対 恥・ 疑惑 自主性 対 罪悪 感	服従と罰 (段階1) 互惠性 (段階2)
児童後期	約6歳か ら約13歳 まで	・操作の速さを除いて、 多くの認知過程が成 人なみになっていく ・チーム遊び	具体的操作期	潜在期	勤勉性 対 劣等 感	良い子 (段階3)
青年期	約13歳か ら約20歳 まで	・思春期の始まり ・成熟の終わり ・最高度の認知の発達 ・両親からの独立 ・性的関係	形式的操作期	性器期	自我同一性 対 自我同一性拡散	法と秩序 (段階4)
成人前期	約20歳か ら約45歳 まで	・職業と家庭の発達			親密性 対 孤立	社会的契約 (段階5)
成人中期 (中年期)	約45歳か ら約65歳 まで	・職業が最高のレベル に達する ・自己評価 ・「空の巣」の危機			世代性 対 自己 陶醉	原理 (段階6または 7, いずれもま れに出現)
成人後期 (老年期)	約65歳か ら死まで	・退職 ・家族や業績を楽しむ ・依存性 ・やもめ暮らし ・健康の弱さ			統合性 対 絶望	
死	—	・特別な意味をもった 「段階」				

老年期Ⅷ								統合 対 絶望、嫌悪 知恵 (wisdom)
成人期Ⅶ							ジェネラティビティ 生成継承性 対 停滞 ケア (care)	
前成人期Ⅵ						親密 対 孤立 愛 (love)		
青年期Ⅴ					アイデンティティ 対 アイデンティティ拡散 忠誠 (fidelity)			
学童期Ⅳ				勤勉性 対 劣等感 有能 (competence)				
遊戯期Ⅲ			自主性 対 罪悪感 目的 (purpose)					
幼児期初期Ⅱ		自立性 対 恥、疑惑 意志 (Will)						
乳児期Ⅰ	基本的信頼 対 基本的不信 希望 (hope)							
	1	2	3	4	5	6	7	8

小嶋秀夫 やまだようこ(2002)『生涯発達心理学』,p158,図12.1,
放送大学教育振興会†

1)乳幼児期(口唇期)

基本的信頼感／不信 (希望)

- 愛着(親との情緒的絆) 近接欲求・摂食欲求の充足経験の重要性→人間関係の基盤(自己および他者に対する信頼)

2)幼児期前期(肛門期)

自律性／恥・疑 (意志)

- 排泄をめぐる葛藤→トイレット・トレーニング
身体運動の飛躍的向上 探索活動
- 自己意識の成立(他者から見られている自分)
自己主張(第一次反抗期)

3) 幼児期後期(エディプス期)

自発性／罪悪感

(目標)

- 同性の親との同一化(性役割行動) 超自我(基準・規範意識)
- 「心の理論」→自己や他者の内面・心的状態の理解

4) 児童期(潜伏期)

勤勉性／劣等感

(有能感)

- 一時的な心身の安定→社会的に価値あるものへの動機づけ
自己統制と義務感
- タテの関係からヨコの関係へ(ギャング・エイジ)
集団生活・社会的ルールの基礎

5)青年期(性器期)

アイデンティティの確立／拡散 (忠誠)

- 第二性徴・性欲動の高まり・心身発達の非同時性→心理的不安定＋社会的不安定(境界人)
- 第二次反抗期(親からの情緒的自律性→友人関係の深まり)
- モラトリアム(試行錯誤しつつ危機を乗り越え本当の自分探し)
- 生きてきた(生かされてきた)自己・生きていこうとする自己・社会に認められる自己 →三つの自己の統合(アイデンティティ)

6)成人期前期(～35歳)

親密性／孤立 (愛)

- 社会人・家庭人としての現実的生活
- 深い信頼に基づいた特定異性とのパートナーシップ

7)成人期後期(35～65歳)

生成継承性／停滞

(世話)

- 社会的責任 次世代の育成
「育てる」を通して「自ら育てられる」
- 中年期の危機(変わりたくないのに変わらないといけない)
- 身体活力の危機・性的能力の危機・対人関係構造の危機・思考の柔軟性の危機
- 空の巣症候群(子離れの課題)
- 老親との関係(役割の逆転・再調整)
- 職業・役割から離れた自分の建て直し
→アイデンティティ再編の課題

8) 老年期

統合／絶望

(英知)

- 退職・対人関係の変化・身体機能の衰え・近親者の死に直面
 - 現実には多くの危機を経験することになるが、それがさらなる心理的成熟の契機になる
 - それまでの自分を肯定的側面・否定的側面すべて合わせて統合的に受容する
 - 社会的ネットワークの重要性(互いにサポートを与え与えられる関係の大切さ)
- * 統合性の達成はそれ以前の各段階における達成の度合い、とりわけその前段階の世代継承性の獲得と相対的に高い相関を有する(Hannah et al.,1996)→生涯に亘る漸成的組織化

- **ペック**: エリクソンの理論を基に成人後期と高齢期の発達課題を詳細化

成人後期: 1)知恵の尊重 / 体力の尊重
2)社会的対人関係 / 性的対人関係
3)情緒的柔軟性 / 情緒的貧困性
4)精神的柔軟性 / 精神的硬直性

高齢期: 1)自我の分化 / 仕事・役割への没入
2)身体の超克 / 身体への没入
3)自我の超克 / 自我への没入

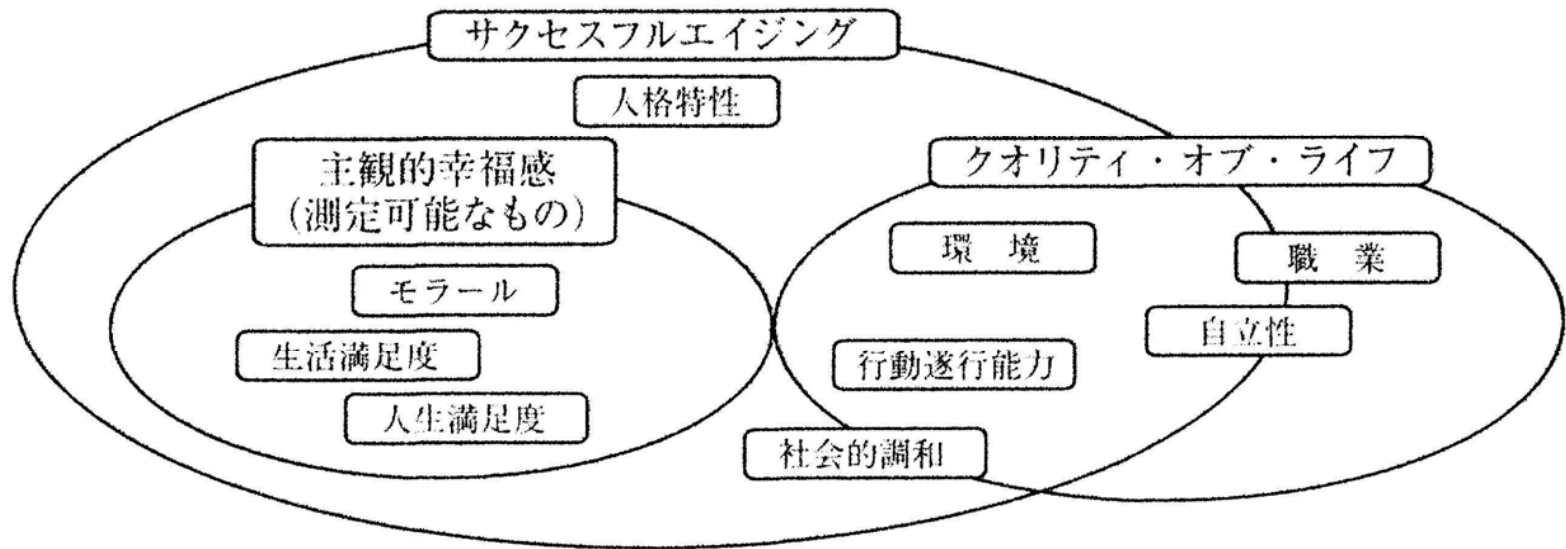
- **レヴィンソン**: エリクソンの論を生活構造の形成という視点から捉え直し
- 男性40名に対する面接に基づいた自伝的事例研究
→「**人生の四季**」
- 人生や安定期と移行期を交互に繰り返しながら進展
- **老年期**: 生活構造を修正し、自己と社会の間に新しいバランスを作る・人間や世界を幅広い観点から理解する・自身の人生を不十分と認識しつつ受容する・自己と他者を許容
- **高齢期**: 個の関心に拘泥せず人間全体の未来へと視野を拡張する・生と死に対して新たな意味づけを行い、死へと近づく過程に順応する

- エリクソン・エリクソン(夫妻):
超高齢期に関して第9段階を仮定
→ 老年的超越性(e.g. Tornstam, 2005)
- 超高齢期にはその前ステージで統合性を獲得した人でさえも危機を経験する可能性
- 心身弱化する現実の前に以前に解決された危機と再び向き合わなくてはならなくなる
- 達観性: 社会と自己の関係の変容・自己概念の変容・宇宙的意識の獲得

VII. サクセスフル・ エイジングとは何か？

- 寿命の伸び
→不健康拡張(expansion of morbidity)か
不健康圧縮(compression of morbidity)か
- 理想は後者だが現実には前者である場合が相対的に多い
- 長く生きること自体よりもよりよく生きること
→**Quality of Life(QOL)** に対する注目
- サクセスフル・エイジング
＝QOLを最大化する年のとり方？

- QOLとは何か？
 - 論者によって見方はまちまち
 - 測度もまちまち
- 「**生命**」の質を重視する見方（医学・保健）：
健康・生活機能等を測定
- 「**生活**」の質を重視する見方（社会・福祉）：
社会経済地位・活動・日常生活の質等を測定
- 「**人生**」の質を重視する見方（心理学など）：
幸福感・生きがい・自己概念等を測定



サクセスフル・エイジング研究に関する概念の整理

下仲順子(2007)『高齢期の心理と臨床心理学』,148頁,図10-1,培風館 卄

- サクセスフル・エイジングの要件

- Rowe & Kahn(1997)

→ 身体的健康と活動性を重視

- ① 病気や障害のリスクを最小化していること
- ② 心身の機能を最大化していること
- ③ 社会的・生産的な活動を維持していること

- Lawton(1975)

→より内面的・主観的な側面を重視

- ①精神医学的徴候がない
- ②楽天的思考
- ③現在の状態を受容
- ④加齢とともに環境が悪化するという認識なし
- ⑤高齢者に対する画一的見方を採らない
- ⑥環境をプラスに評価

- a)自分自身に対する高い満足感(達成感・自分が有用な人物であるという自覚)
- b)努力しても動かしがたいことを事実として受容
- c)自分の居場所があるという感覚(他者および環境が自分の欲求に適うものを十分に与えてくれていると満足感)

- ロートン(Lawton)

- PGC(Philadelphia Geriatric Center)モラール・スケール

- 心理的安定・老いに対する態度・孤独感を測定し、高齢者のQOLに迫ろうとする

PGCモラールスケール改訂版

1. 年をとるほど物事は悪くなっていくと思いますか？
1 そう思う 2 そうは思わない
2. 去年と同じように元気ですか？
1 はい 2 いいえ
3. さびしいと感じることがありますか？
1 ない 2 あまりない 3 時々感じる 4 いつも感じる
4. 今年になって、以前よりもささいなことが気になるようになりましたか？
1 はい 2 いいえ
5. 友人や親戚によく会いますか？
1 はい 2 いいえ
6. 年をとるにつれて役に立たなくなると思いますか？
1 そう思う 2 そうは思わない
7. 心配だったり、気になったりして眠れないことがありますか？
1 ある 2 ない
8. 年をとるといことは、若いときに考えていたよりも良いと思いますか？
1 良い 2 同じ 3 悪い
9. 生きていても仕方がないと思うことがありますか？
1 ある 2 あまりない 3 ない
10. 今も若いときと同じように幸せだと思いますか？
1 はい 2 いいえ
11. 悲しいことがたくさんありますか？
1 はい 2 いいえ
12. いろいろなことを心配しますか？
1 はい 2 いいえ
13. 以前よりも腹を立てることが多くなりましたか？
1 はい 2 いいえ
14. あなたにとって、生きるということは大変なことですか？
1 はい 2 いいえ
15. 今の生活に満足していますか？
1 はい 2 いいえ
16. 物事を深刻に考える方ですか？
1 はい 2 いいえ
17. ちょっとの事でおろおろする方ですか？
1 はい 2 いいえ

注) 下線の回答に 1 点を与える。得点可能範囲は 0 ～ 17 点。

Lawton, M.P. (2003), Lawton's PGC Morale Scale [Morale Scale created by M. Powell Lawton (1923-2001) while at the Polisher Research Institute of the Philadelphia Geriatric Center (now known as the Abramson Center for Jewish Life)]. 谷口幸一 佐藤眞一(2007)『エイジング心理学—老いについての理解と支援』,pp41,表3-3北大路書房]†

- 活動という観点からのサクセスフル・エイジング
- 活動理論(activity theory):
高い活動性の維持が幸福感の鍵
- 離脱理論(disengagement theory):
高い活動領域からの漸次的離脱が幸福感の鍵
- 連続理論(continuity theory):
活動か離脱かは人によって異なり、前段階との連続性が鍵

活動理論 (activity theory)

提唱者：Havighurst, R.J. and Albrecht, R. ^{★¹}

職業は、成人期の個人生活の多くを占めており、個人に役割を与え、対人的交流や能力を発揮する機会を与えてくれる。個人は、そのような場面でこそ喜びや生きがいを感じることができる。すなわち、職業は、人に生きる意味を与えてくれる重要な生活の場である。こうした観点からみれば、職業からの引退は、その後の生活における不適応の直接の原因であるから、職業において得ていたものを引退後も継承すること、つまり、活動の継続こそ、老年期の幸福感を維持させるもの、ということになる。

離脱理論 (disengagement theory) ^{★²}

提唱者：Cumming, E. and Henry, W.H.

引退のもたらす個人の活動量の低下と人間関係の減少は、加齢にともなう自然で避けられない過程であり、それは産業上の世代交代あるいは社会の機能を保つという意味で必然的なことであるばかりでなく、個人の人生を職業生活や他者との関係にのみ結びつけずに、自分自身の内なる世界、個人的な価値や目標の達成に費やすための時間として個人が望むものである。

連続性理論 (continuity theory) ^{★³}

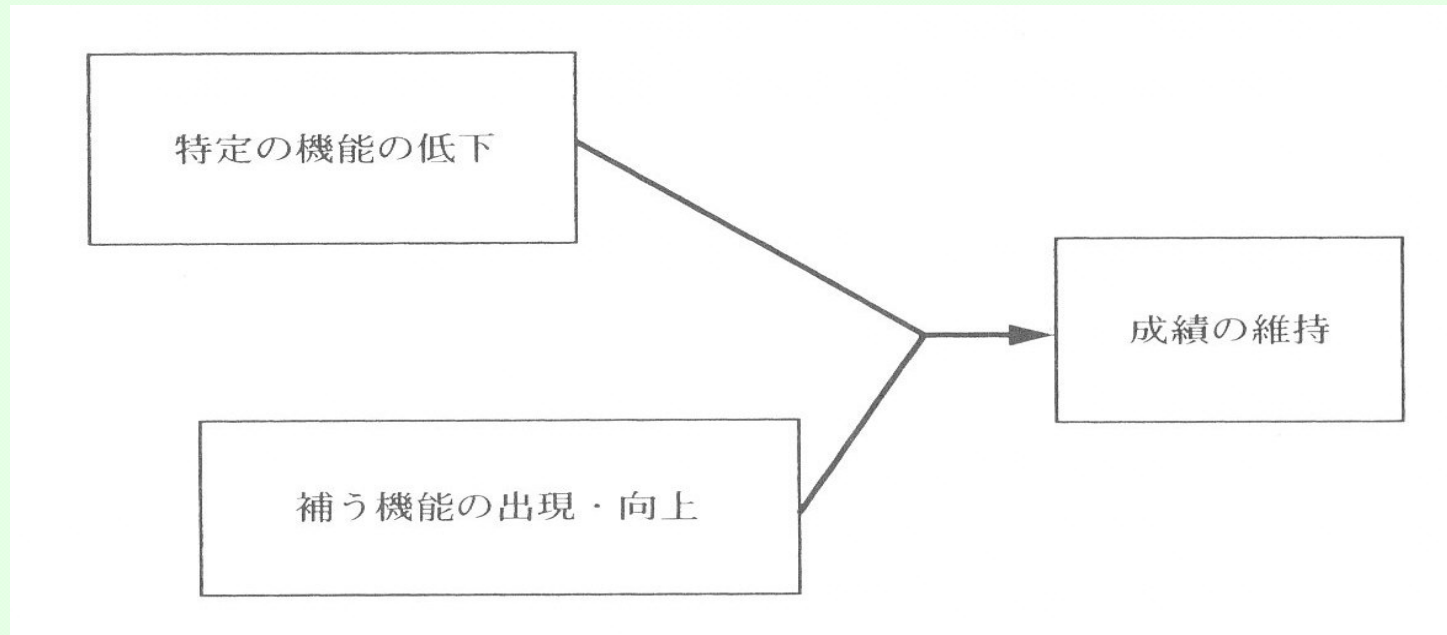
提唱者：Neugarten, B.L. et al.

社会的離脱によって老年期に適応できるか否かは、個人のパーソナリティによって異なる。老年期にある個人も、発達心理学的観点からみれば、その前段階からの変化が連続しており、その変化もまた個人が選択してきたものである。

サクセスフル・エイジングの諸理論

(谷口幸一 佐藤真一(2007)『エイジング心理学—老いについての理解と支援』,pp38,表3-1 北大路書房) †

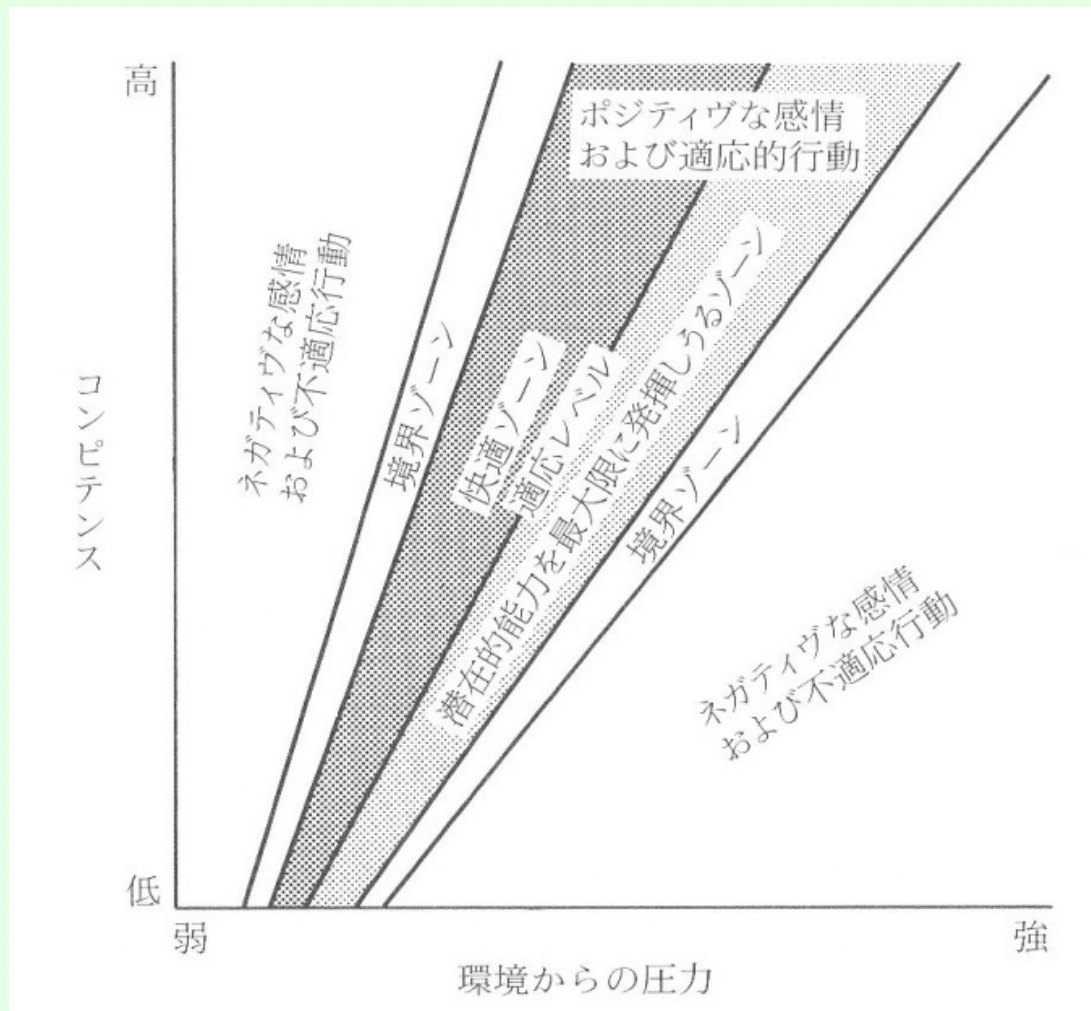
- 補償を伴う選択的最適化
- **SOC: Selective Optimization with Compensation (Baltes et al., 1980)**
 - 心身機能の低下という現実に対する健康的かつ適応的な対処
- 以前よりも狭い領域や特異な内容を探索し(選択)、それに対する適応の機会を増大させ(最適化)、新たな方法や手段を獲得することで機能の低下を補う(補償)
 - コンピテンスと環境的圧力のバランスを調整する・バランスのとれた状態に身を置く



補償的变化の可能性

(小嶋秀夫 やまだようこ(2002)『生涯発達心理学』,p181,図13.3,
放送大学教育振興会) †

- アルトウール・ルービンシュタイン
- ポーランド出身のピアニスト
- 95年の人生 89歳まで現役
- 選択→曲の絞り込み(楽しみつつ高度な表現)
- 最適化→1曲あたりの練習時間を増やす
- 補償→運指の衰えに対してテンポの調整
(少しのアップテンポをアレグロに聴かせる)



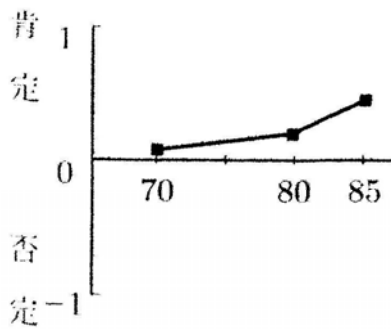
コンピテンスと環境からの圧力との関係

(Lawton, M.P. & Nahemow, L. (1973). Ecology of the aging process. In C. Eisdorfer & M.P. Lawton (eds.), "The psychology of adult development and aging", pp619-674, American Psychological Association)

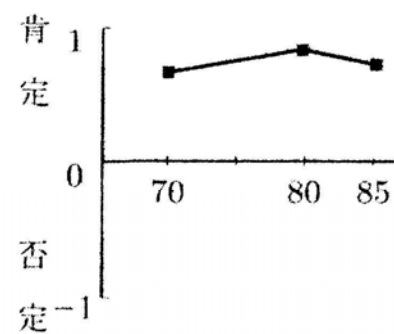
[無藤隆 久保ゆかり 遠藤利彦(1995) (1995) 『現代心理学入門2 発達心理学』, p194, 図11.6, 岩波書店] †

- 人生後半の適応性・自己概念・パーソナリティ等の得点上における変化→微少
- しかし、多く的人是は過去に比べて現在の自分が成長していると主観的に把握する
- 肯定的幻想(positive illusion)や自己高揚動機→主観的幸福感の1つの鍵

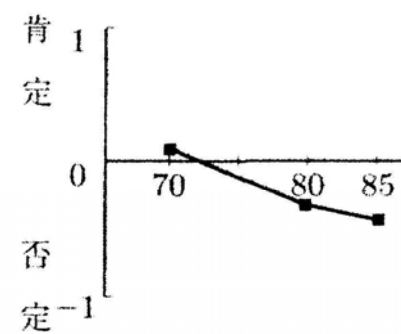
過去の自己
(これまでは…)



現在の自己
(今の私は…)



未来の自己
(いつかそのうち私は…)



文章完成法における自己概念の変化(下仲・中里,1999)

下仲順子(2007)『高齢期の心理と臨床心理学』,89頁,図6-7,培風館 ㊦

- Oldest Oldあるいは百寿者から学べること、学べないこと
- 健康的生活・楽観的かつ外向的で前向きな性格・豊かな対人関係……
- 一部超えがたい不連続面の存在：
(e.g. W. チャーチル)
- すべてをサクセスフル・エイジングのモデルとはできないところもある→体質や個性に応じたそれぞれの形の模索

VIII. 生涯発達心理学 の課題

誰がいかに捉えるのか？

- 連続性と変化の多面性
- 連続性と変化に関わる基準（個内・個間）

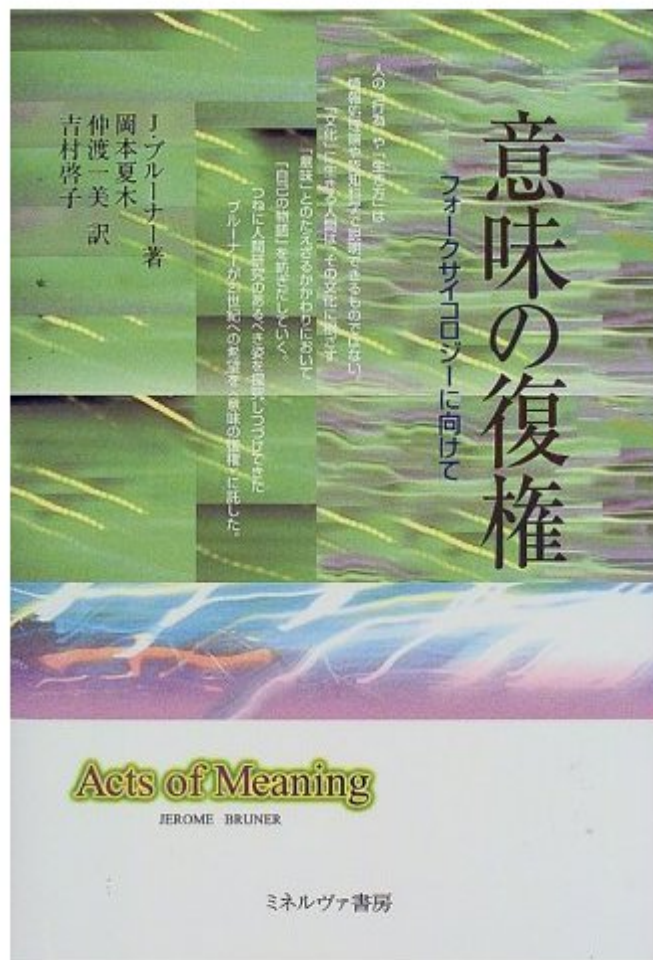
Variable-oriented

Person-oriented

Agent-oriented

- 従来の発達心理学→多くは「変数志向的(variable-oriented)アプローチ」を採る
- 人というよりは特定の能力や特性などの変化と連続性に関心
- アタッチメント研究を始め、長期縦断的デザインを採る研究→部分的に「個人志向的(person-oriented)アプローチ」を採る
- 人を分類・タイプ分けなどし、その後の連続性や変化を長期的に追跡する
- しかし、これも研究者の理論的枠組みに沿った人理解に他ならない

- 自らの人生を生きる主体への関心
→「主体志向的(agent-oriented)アプローチ」
- 人は主体的に経験の組織化・意味の生成・アイデンティティの再編・維持を行う
- ブルーナー:現象理解の2つのモード
→論理実証モードと物語モード
- 個々の主観性を掬い取る必要性→ナラティブへの注目→"narrative-gerontology"



Making Stories ストーリーの心理学

法・文学・生をむすぶ

J・ブルーナー 著
岡本夏木・吉村啓子・添田久美子 訳



Jerome Bruner

ミネルヴァ書房

J・ブルーナー著；岡本夏木,仲渡一美,吉村啓子訳(1999)『意味の復権：フォークサイコロジーに向けて』,ミネルヴァ書房

J・ブルーナー著；岡本夏木,吉村啓子,添田久美子訳(2007)『ストーリーの心理学 法・文学・生をむすぶ』,ミネルヴァ書房

- 高齢者に対するナラティブ・アプローチ：
研究の現況(野村,2005)

- 1) 「老い」の意味づけを知る
- 2) アイデンティティの様相を知る
- 3) 記憶の再構成のあり方を知る
(→「回想法」の臨床・実践的活用)
- 4) 「老い」をめぐる社会文化の特質を知る

etc.

- しかし、主体志向的アプローチ一辺倒であってもいけない
- 人の自己語り→多少とも文化に潜在する**マスター・ナラティブ**に依拠
- 加齢を衰退とするナラティブに沿った自己概念・暗黙のライフストーリー（それに反するナラティブよりも他者の了解を得られやすい）
- **マスター・ナラティブとエイジズム**はしばしば重なりを有する
- マスター・ナラティブに沿った**自己確証過程・自己成就予言**→「老い」を深める
（→**エイジズムを自らに課す愚を避ける**）

- トライアングレーション(方法論的複眼)による理解
- QOLや適応を問題にする際、それは「誰が想定する誰にとっての幸福か」を意識
- 第三者・理論が想定する幸福と主体が想定する幸福とのバランスをいかに図るか
→生涯発達心理学・ジェロントロジーの大きな課題

The description, explanation, modification
of

within-individual change / stability

from birth to death

and

between-individual differences / similarities

in within-individual changes.

(e.g. Baltes et al., 1980)

発達における連続性と変化

① continuity and change

in each stage ○

from one stage to another △

(e.g. from temperament to personality)

② continuity and change

out of context / relationship ○

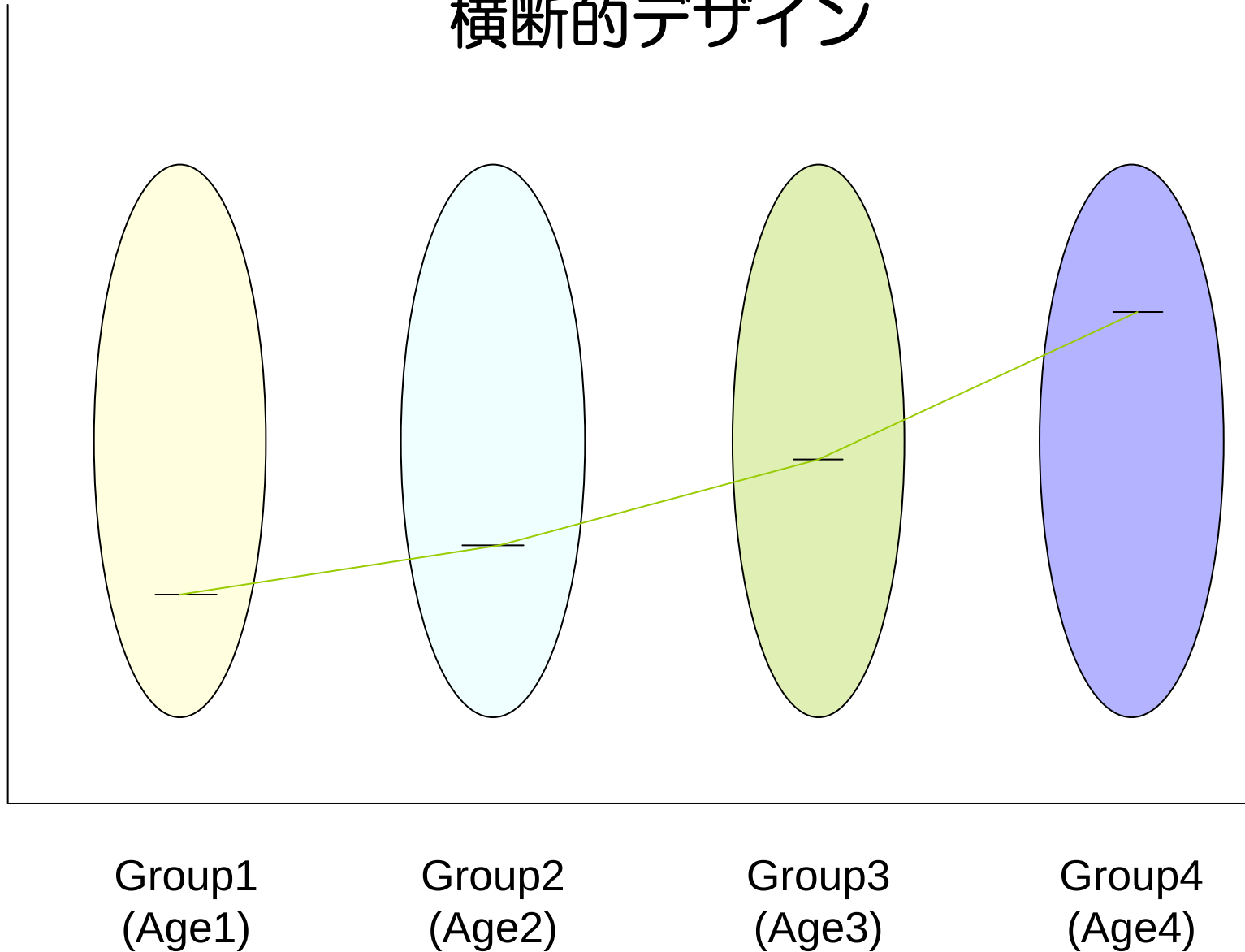
in context / relationship △ in total life ×

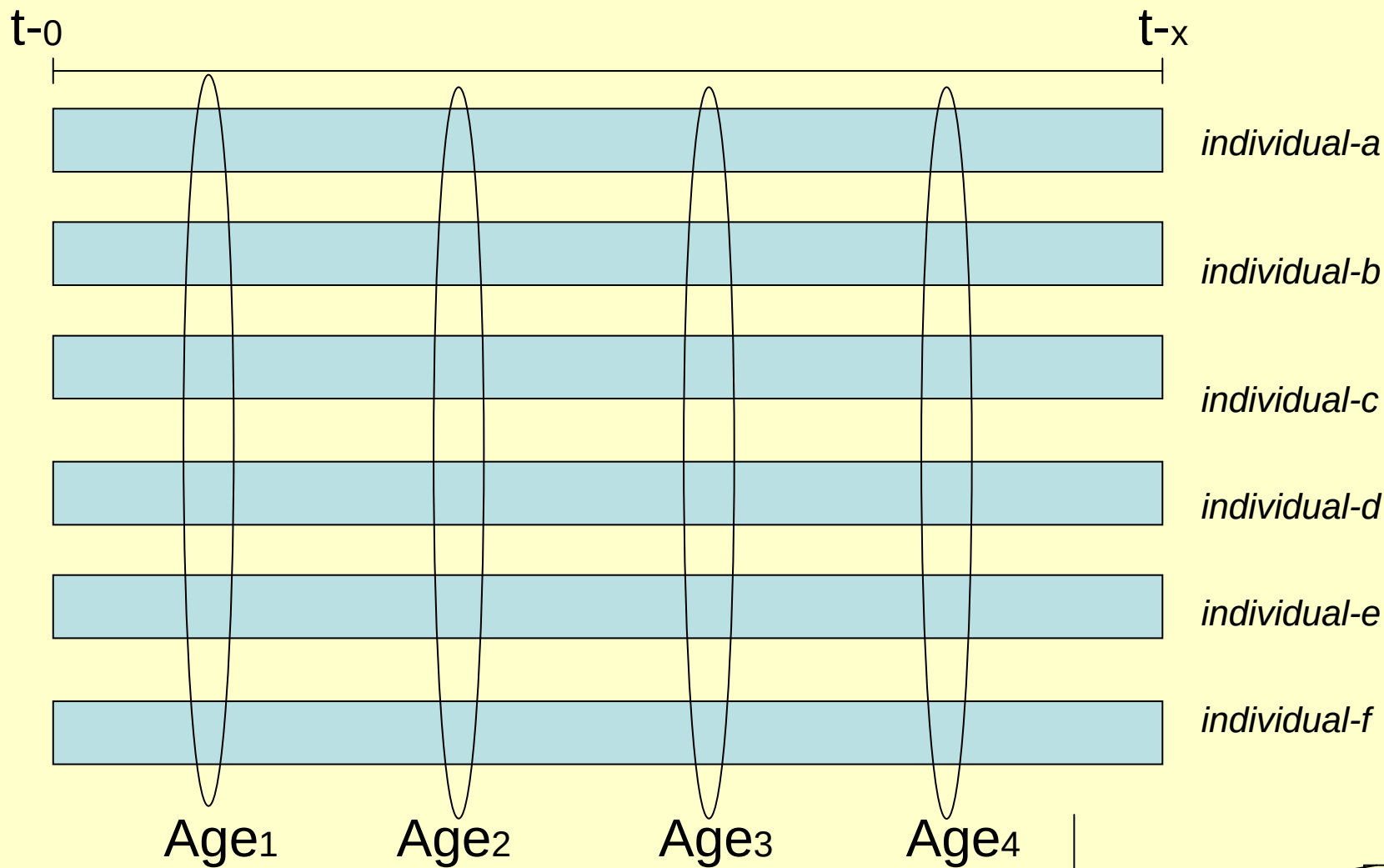
③ continuity and change

group-oriented : mean-level, rank-order, structure ○

person-oriented : intraindividual (ipsative) △

横断的デザイン



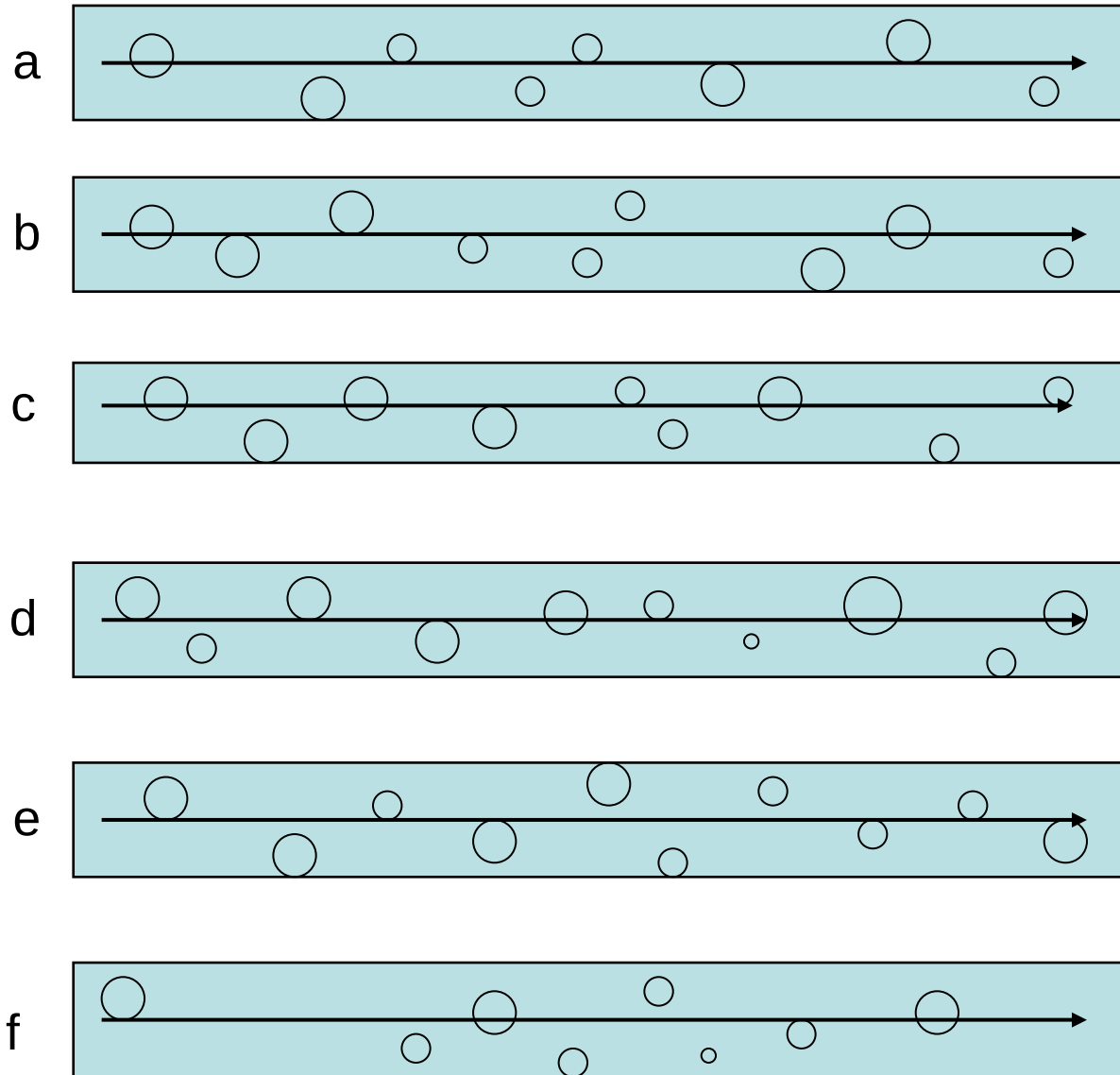


縦断的デザイン



- 生涯発達心理学の最も基本的な方法
= 集団の各年齢時における代表値をつなぐ方法
→ 基本的に発達パターンは単一の曲線
異種パターンは捨象されてしまいがち
- 発達経路の多様性・複数性を解明する必要性
→ 新たな統計解析法の適用
潜在成長曲線分析 etc.
→ 時系列変化パターンの個人間比較
質的方法・multiple case study method etc.

Within individual



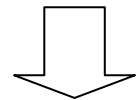
t0

tx

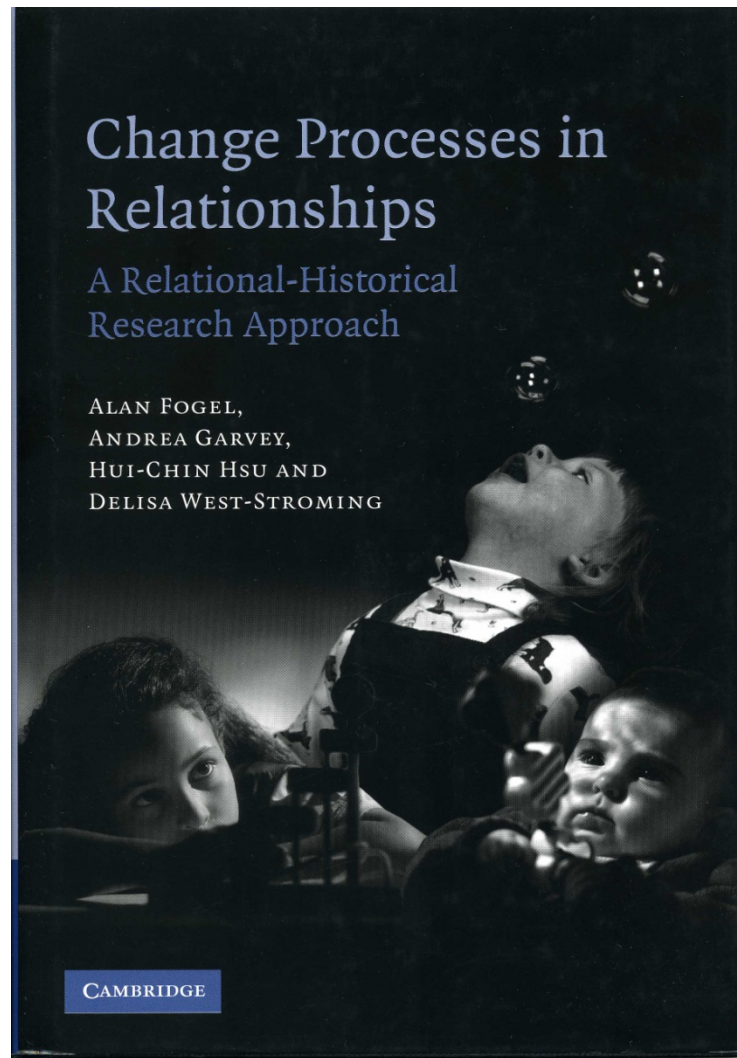
Between individuals

Similarities
Differences

Intraindividual



***Normative
nomothetic***



The scientific study of change is a oxymoron.

Alan Fogel, Andrea Garvey, Hui-Chin Hsu, Delisa West-Stroming (2006), "Change Processes in Relationships", Cambridge University Press ‡